山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第52集

中　込　遺　跡

NAKA　GOMI　SITE

八ヶ岳広域農道建設に伴う発掘調査報告書

1990.3

山梨県教育委員会

山梨県農務部

中　込　遺　跡

NAKA　GOMI　SITE

八ヶ岳広域農道建設に伴う発掘調査報告書

1990．3

序

本報告書は、1989年度に実施した八ケ岳広域農道建設に伴う中込遺跡の発掘調査の結果をまとめたものであります。

本遺跡の所在する山梨県北巨摩郡長坂町は、八ケ岳南麓に位置しますが、八ケ岳は、山梨・長野両県にまたがり南北に長く連なる火山で、第四紀更新世の初期に活動を開始した、比較的古い火山であり山麓一帯には、先土器時代以来の遺跡が数多く分布し、遺跡の宝庫として知られておりますが、ここの山麓一帯の開発事業も近年とみに増加しております。圃場整備事業、ゴルフ場・別荘分譲地などのリゾート開発事業など大規模なものがあります。八ケ岳広域農道もその一つで、小淵沢町から長坂町、大泉村を経て須玉町に至る長大な計画であります。当埋蔵文化財センターでは、1986年度と1988年度に国庫補助事業として試掘調査及び分布調査を行い、八ケ岳広域農道予定地内の遺跡分布の確認作業を進めてまいりました。また、1987年度には須玉町西川遺跡、1988年度には高根町妻ノ神遺跡の発掘調査を、八ケ岳広域農道建設工事に先立って行ってまいりました。

中込遺跡は、1988年度の試掘調査で確認された遺跡であります。東西を流れ山に挟まれた狭小な河岸段丘上の遺跡ではありますが、本県最古の土器となります、縄文時代草創期の爪形文土器をはじめ、縄文時代早期末の絡条体圧痕文土器など、これまで県内であまり発見例のない資料を得ることができました。また、遺構の発見こそできませんでしたが、土器や石器の分布状況の分析から、縄文時代早期末や中期の生活の一端を垣間見ることができました。縄文時代の生活は、住居址の集中する集落址において完結するものではなく、本遺跡のような遺跡をも含んだ構造をもつものとの理解を示すことができました。こうした成果が、今後の縄文時代研究の一助となれば幸甚です。

末筆ながら、種々ご指導・ご協力を賜わった関係機関各位、並びに直接調査に当たられた方々に厚く御礼申し上げます。

1990年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長　磯　貝　正　義

例　　言

1. 本書は、山梨県北巨摩郡長坂町大井ケ森字中込に所在する中込（なかごみ）遺跡の報告書である。
2. 本調査は、八ケ岳広域農道の建設工事にともなうもので、山梨県農務部の負担金と文化庁の国庫補助金をうけて、山梨県教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査および出土品の整理は、山梨県埋蔵文化財センターが行った。
4. 本書の編集は浅利司が行なった。執筆は第2章および第5章1節を浅利が、その外は保坂康夫が行った。なお、付編の分析および執筆は河西学氏（帝京大学山梨文化財研究所）にお願いした。
5. 石器の石材鑑定は、河西学氏にお願いした。
6. 出土品および図面、写真は、山梨県埋蔵文化財センターが保管している。
7. 発掘調査から報告書作成にいたる過程で、次の方々から特に多大なご協力をいただいた。心より謝意を表する。（敬称略）

小林達雄（國学院大学教授）、可児通宏（東京都埋蔵文化財センター）、谷口康浩（國学院大学助手）、桜井真貴（長坂町教育委員会）、長島広一（大井ケ森区長）、板山正夫（長坂町文化財審議会委員）、矢島正純（峡北土地改良事務所）、水地英之（峡北土地改良事務所）、河西学（帝京大学山梨文化財研究所）

目　　次

第１章　調査の経過と組織 …… 1
　第１節　調査経過 …… 1
　第２節　調査組織 …… 1

第２章　遺跡の立地と周辺の遺跡 …… 2
　第１節　遺跡の立地 …… 2
　第２節　周辺の遺跡 …… 3

第３章　発掘の方法 …… 4

第４章　層序と遺物の出土状態 …… 5

第５章　遺　物 …… 9
　第１節　土　器 …… 9
　第２節　石　器 …… 23

第６章　まとめ …… 32

　註 …… 35

付編　長坂町中込遺跡資料のテフラ分析 …… 36

写真図版 …… 41

挿　図　目　次

第１図　中込遺跡位置および周辺遺跡分布図 …… 2
第２図　遺跡周辺地形および発掘区 …… 4
第３図　発掘区北壁土層図 …… 6
第４図　発掘区南壁土層図 …… 7
第５図　全遺物出土状況（平面分布図・垂直分布図）…… 8
第６図　中込遺跡出土土器（１）…… 10
第７図　中込遺跡出土土器（２）…… 12
第８図　中込遺跡出土土器（３）…… 13
第９図　中込遺跡出土土器（４）…… 15
第10図　土器平面分布図（１）…… 17
第11図　土器平面分布図（２）…… 18
第12図　土器垂直分布図（１）…… 19
第13図　土器垂直分布図（２）…… 20
第14図　土器垂直分布図（３）…… 21
第15図　中込遺跡出土石器（１）…… 24
第16図　中込遺跡出土石器（２）…… 25
第17図　中込遺跡出土石器（３）…… 26
第18図　中込遺跡出土石器（４）…… 27
第19図　石器器種別平面分布図 …… 29
第20図　石器垂直分布図 …… 30

付編第１表　中込遺跡試料の含有鉱物粒数 …… 37
付編第１図　中込遺跡のＡ・Ｂ地点試料の粒形組成、火山ガラス、
軽・重鉱物組成、火山ガラス含有率、重鉱物組成 …… 39

写真図版目次

図版１　中込遺跡遠景、土器出土状況、発掘風景、東区遺物出土状況
図版２　南壁セクション、西区トレンチ、東区東半発掘状況
図版３　第Ⅰ群土器、第Ⅱ群１類土器、第Ⅱ５類土器
図版４　第Ⅱ群２類土器（表面）、第Ⅱ群２類土器（裏面）、第Ⅱ群２類土器（裏面拡大）
第Ⅱ群２類・３類土器、第Ⅱ群２類土器（貝殻腹縁文）、第Ⅱ群５類土器
図版５　第Ⅲ群１類土器、第Ⅳ群土器
図版６　黒曜石製石器と磨製鏃、堆積岩系石材の剝片・礫片、打製石斧と横刃型石器、磨石・礫器・くぼみ石

第 1 章　調査の経過と組織

第1節　調査経過

本遺跡発掘調査の原因となった八ケ岳広域農道は、昭和60年度から具体化してきたが、県教育委員会では、昭和61年度から分布調査、試掘調査、発掘調査を行ってきた。昭和61年度と昭和63年度に、八ケ岳東南麓他遺跡分布調査事業として文化庁の補助金を受け、試掘調査と分布調査を行った。(1)これらの調査で、昭和61年度に7カ所、昭和63年度に4カ所の試掘調査を行い、合計5カ所の遺跡が確認された。このうち、昭和62年度に須玉町西川遺跡、(2)昭和63年度に高根町妻ノ神遺跡(3)の本調査を実施した。本遺跡は、昭和63年度の試掘調査で確認された。調査面積は、970㎡。調査費用は、文化庁と農林水産省との覚書に基づいて算出し、平成元年度当初予算に計上した。

本遺跡の調査経過は、次のとおりである。平成元年4月に発掘通知を文化庁長官に提出。同年6月5日に発掘調査に着手。同年7月26日に発掘調査終了。同年11月に、長坂警察署長に埋蔵文化財の発見通知を提出。同年12月に整理作業に入った。

第2節　調査組織

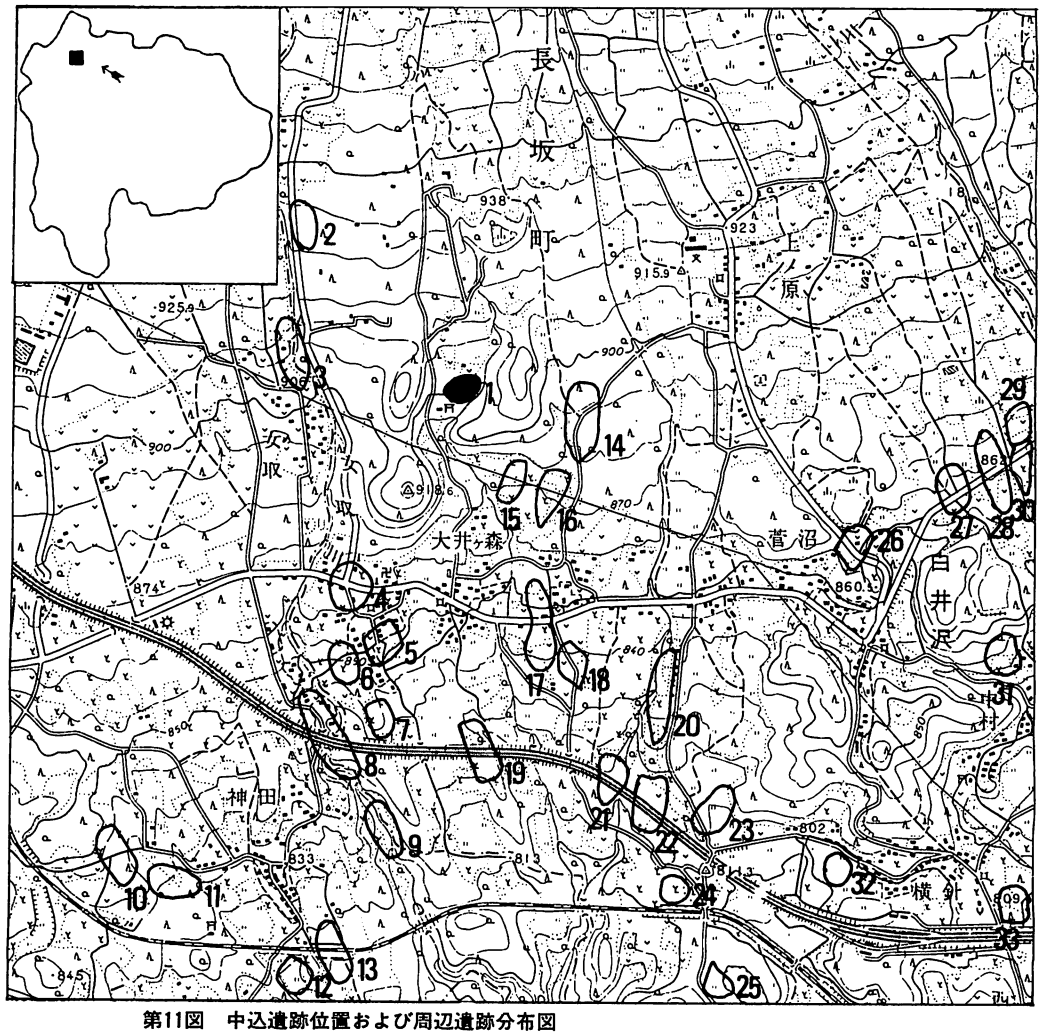
調査主体	山梨県教育委員会
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者	保坂康夫、浅利司
作業員	相良きく子、清水つね子、清水あつ子、清水里代、清水明夫、清水郁江、板山すず子、葉山玉子、小沢福子、小沢三七子、小沢みずえ、日向一子、滝田武子、平嶋弘子、八巻久子、八巻栄、野口キヨ子、内堀つる子
整理作業員	宇野富貴子、竜沢徳子、柏木まつ江、小林敬子、江川勝子、矢崎米子、長田美和子、小林としみ、長田明美、小林よ志子、石原はつ子、伊林佳子、田中弘子
協力機関	長坂町教育委員会

第 2 章　遺跡の立地と周辺の遺跡

第 1 節　遺跡の立地

中込遺跡は、長野県との県境に近い八ケ岳南麓の、山梨県北巨摩郡長坂町大井ケ森字中込に位置する。標高は約 900 m である。この付近には、八ケ岳のなだらかな裾野が広がり、落葉松を中心とする広大な森林がこれを覆っている。近年は別荘等の建設が多い。このなだらかな地形

1.中込遺跡　2.手白尾遺跡　3.篠八田遺跡　4.上フノリ平北遺跡　5.上フノリ平遺跡　6.上フノリ平西遺跡　7.上フノリ平南遺跡　8.小野遺跡　9.神田遺跡　10.西三蔵主遺跡　11.柳沢北遺跡　12.柳沢南遺跡　13.広面北遺跡　14.夫婦石遺跡　15.横山 1 遺跡　16.横山 2 遺跡　17.横山平遺跡　18.葛原北遺跡　19.下フノリ平遺跡　20.東下屋敷遺跡　21.葛原遺跡　22.西下屋敷遺跡　23.新田森遺跡　24.西下屋敷南遺跡　25.越中久保遺跡　26.菅沼遺跡　27.沢入遺跡　28.牛久保遺跡　29.糀屋敷北遺跡　30.糀屋敷遺跡　31.横手遺跡　32.横針遺跡　33.米山遺跡



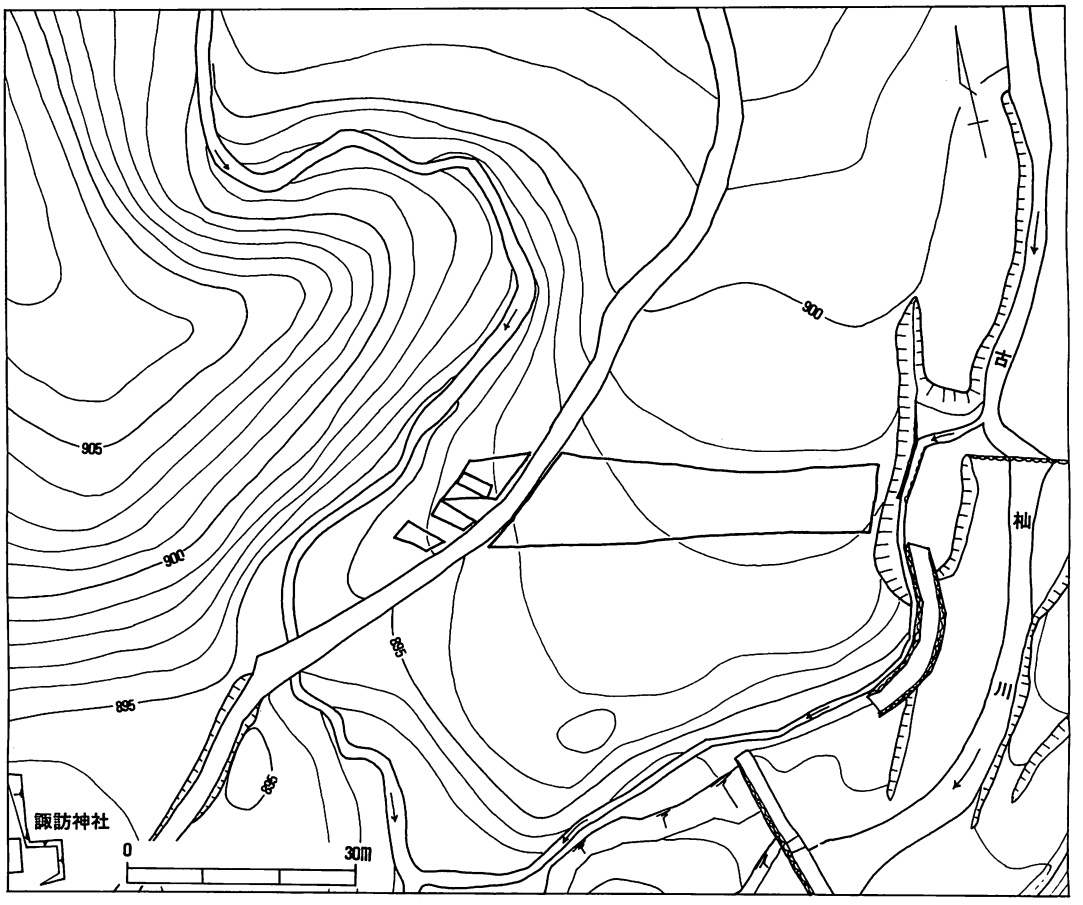
第11図　中込遺跡位置および周辺遺跡分布図
（国土地理院発行 1／25000地形図小淵沢図幅使用）

は、基本的には、20～30万年前の八ケ岳大噴火による山体崩壊で発生したといわれる韮崎岩屑流を基盤とし、その上に弘法坂礫層がのり（ただし、本遺跡周辺にはみられない）、さらにローム層がこれを覆って形成されている。この裾野を開削するように何本かの河川が、深い渓谷をつくりながら南下している。中込遺跡の付近には、これらの河川の源流とも言うべき湧水が多い。「大泉」・「小泉」といった地名はそれを証明している。

本遺跡は、これらの小河川のひとつである古杣川がつくりだした、幅70mほどの小さな河岸段丘上に立地している。古杣川の対岸と遺跡の西側は、八ケ岳の山体崩壊によってできたと思われる、標高差20mほどの小高い山（いわゆる「流れ山」）となっている。このような「流れ山」は、八ケ岳南麓には数多くみられ、中世にはしばしば山城として利用されている。西側の「流れ山」との境には、古杣川に注ぐ小支流が小さな谷を刻みながら流れ、遺跡の50mほど南で古杣川に合流している。段丘面と現河川との標高差は5mほどで、遺跡のすぐ東で崖をつくっている。段丘面（遺跡面）は、東側が高く西側に低いが、その中にも緩やかな起伏がある。古杣川沿いは平坦になっているものの、地表から30cmほどで韮崎岩屑流が顔をだしてしまう。これに続く西には浅い谷が入り、発掘区の中央付近で尾根になり、さらにその西側に浅い谷が入る。道路を挟んでさらに西側は、古杣川に注ぐ小支流にむかって傾斜している。遺跡の北側は、緩傾斜の平坦面となっており、現在は水田として利用されている。

第2節　周辺の遺跡

八ケ岳南麓は、内陸地域でしかも標高が1000mに及ぶため、気候は冷涼である。しかし付近にはかなりの数の遺跡が分布している。(4)先土器時代の遺跡としては、第1図の範囲外になるが、山梨県高根町丘の公園遺跡群、長野県原村弓振日向・向尾根遺跡などがある。長坂町内では発掘例はないが、同町下条よりポイントが表採されている。(5)遺跡の性格上、この他にも未確認の遺跡があることが予想される。続く縄文時代の遺跡は、草創期・早期の遺跡がほとんど見当らないほかは非常に多く分布している。ことに前期後半から中期にかけては、爆発的に増加する。後期・晩期になると数を減らしてゆくが、隣接する大泉村には、この時期の大規模な祭祀遺跡である金生遺跡があり、引き続き人々の重要な生活の場であったことが窺われる。縄文時代の遺跡としては、第1図の32を除くすべてが該当する。弥生時代の遺跡は比較的多い。特に注目されるのは、条痕文系の土器を出土する遺跡が多いことである。山梨県の他地域と比較しても著しく多い。弥生文化の県内への流入を考える上で重要な地域である。図の3・9・20・28・32が弥生時代の遺跡である。古墳時代～奈良時代の遺跡は少ない。図の25・32が該当する。しかし平安時代になると遺跡は増加し、規模も大きくなる傾向を示す。牧の経営も含めて組織的な開発の手が入っていったことも考えられる。図の8・9・10・13・17・25が該当する。中世以降の遺跡も、町指定の史跡である深草館跡をはじめとして、小和田館跡(6)などいくつか存在する。図中では22・25・31・33が該当する。戦国期には、「棒道」と称する軍事道路が、この付近を通過していた。



第２図　遺跡周辺地形および発掘区

第３章　発掘の方法

調査坑の配置状況については、第２図中に示した。道路建設に伴い買収された地域に、道路建設のための幅杭が打たれており、その地域いっぱいに、調査坑を設定した。当地は山林であったが、すでに樹木の伐採、持ち出しは終了していた。出土遺物の包含層が表土直下のため、表土より人力で掘り下げた。下草刈りし、伐根を行いながら掘り進んだ。調査区は、道より西側と東側と２分して設定して、東側は広範囲で、遺跡の中心に位置する。西側は、小河川に面する傾斜面であり、試掘坑周辺を５×５ｍ程度の範囲で面的に掘り下げたが、遺物の出土もほとんどなかった。土層の確認のため、長さ３ｍ、幅1.5ｍ程度の調査坑を３本設定して、基盤の礫層（韮崎岩屑流に含まれるもの）まで掘り下げた。結果的に、深さ１～1.5ｍ程度まで掘り下げた。

道より東側の発掘区では、多量に遺物が出土した。全面的に基盤層の韮崎岩屑流まで掘り下げた。排土の都合で、北半を先に調査し、南半部に置いた排土を重機で北半に移して、南半部

の調査を行った。遺物は全点位置、レベルを記録した。この作業には、光波測量機と小型コンピューターを用いた。また、分布図作成等の作業も、パソコンとプロッターを用いて行った。

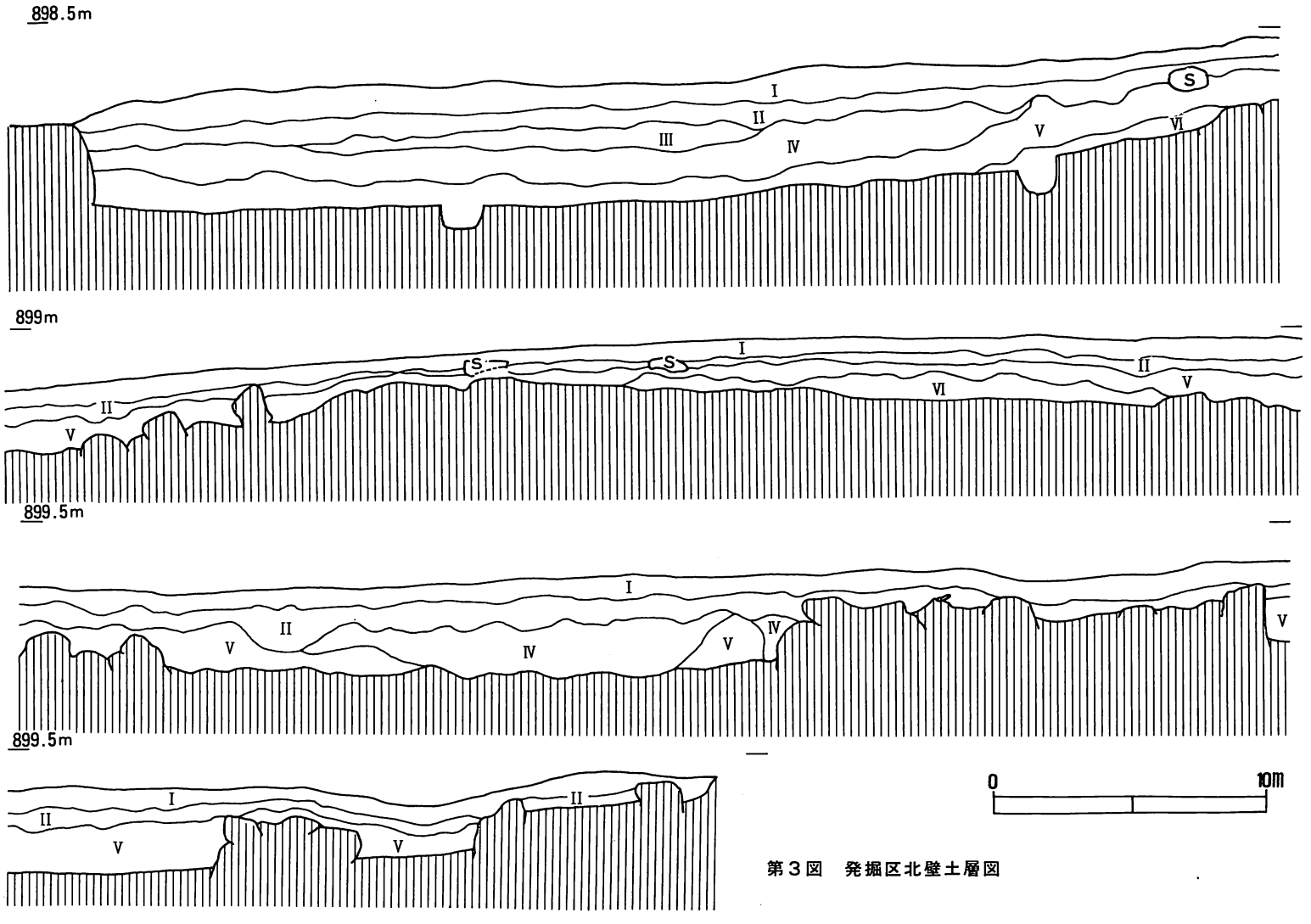
第 4 章　層序と遺物の出土状態

層序については次のとおりである（第３・４図）、Ⅰ層表土。灰褐色でしまりがない。大戦直後に畑であったとのことで、この層が耕作土と考えられる。Ⅱ層黒色土。非常に黒味が強く、下層より軟質。地形の高まりではやや薄いが、10～20cmのほぼ一定の厚さで全域に分布する。Ⅲ層黄褐色土。Ⅲ・Ⅳ層は、黒褐色土であるが、その上部にあり、かつその中に黄褐色砂質土のブロックを多く含む層である。地形の高まり上にある溝状の窪地内や緩傾斜地との地形の変換点付近にみられる。Ⅳ層黒褐色土。Ⅱ層より硬質、砂質で、褐色味が強い。地形の高まりではみられず、窪地など、地形の低い所にみられる。南壁では、高まりと緩傾斜地との地形の変換点付近で、黒みが非常に強かった。Ⅴ層褐色土。基盤の砂礫層のブロックを多量に含み、砂質である。全域に分布するが、地形の高まり部分では、その上部にⅢ層を含んでいる可能性がある。Ⅵ層砂礫軟化層。砂礫層上部がやや軟化した部分。調査はこの層の上面まで行った。なお、基盤は、砂礫層であるが、第６章に示すとおり、20～30万年前の八ケ岳の火山活動に伴う韮崎岩屑流である。

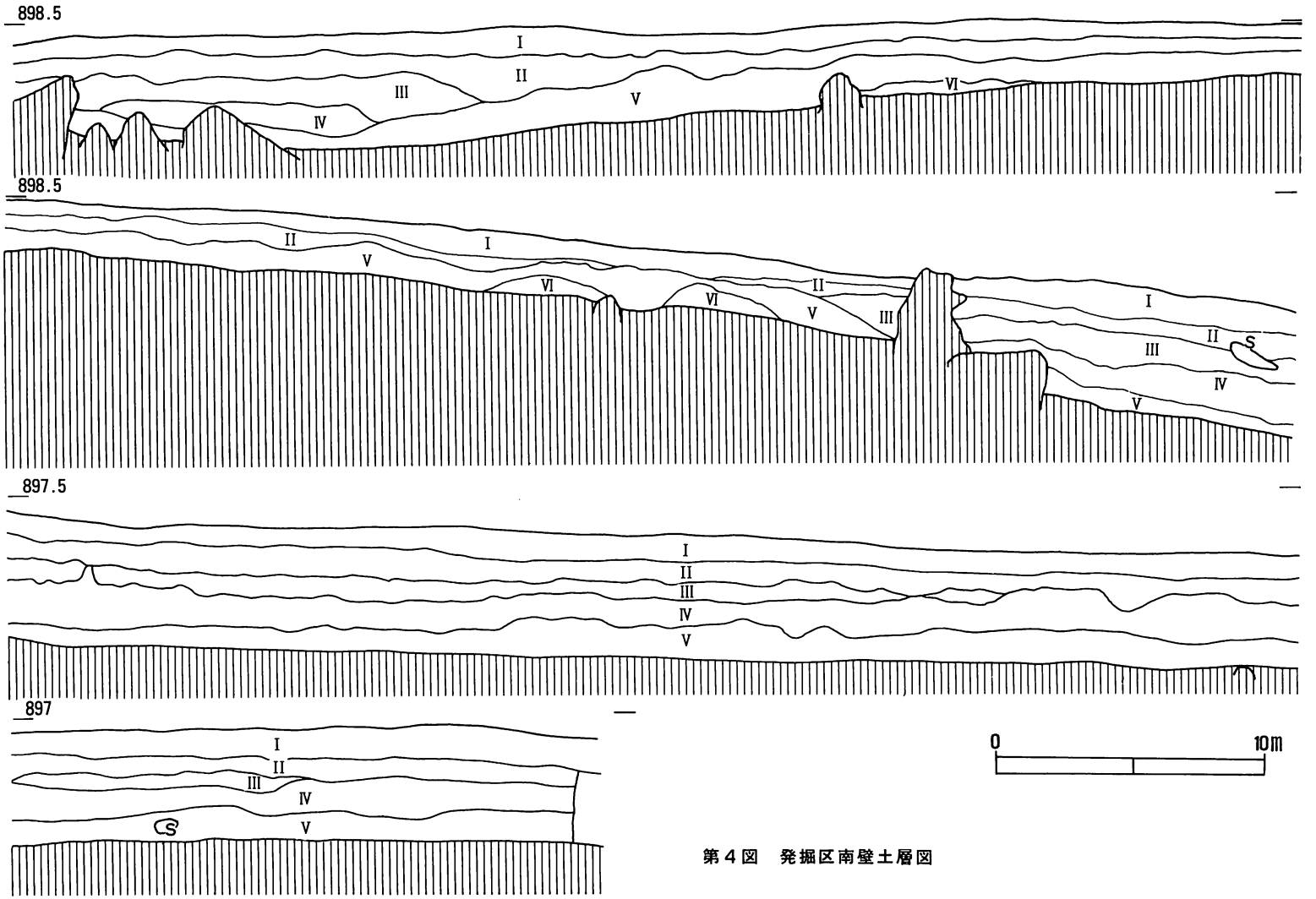
ところで、Ⅱ層とⅢ層以下とでは、大きく性質を異にしている。両者は、色調など現地で見るかぎりにおいての特性の違いがみられる。特に注目すべきは、分布状況の違いである。Ⅱ層黒褐色土は、ほぼ全体に分布がみられるのに対し、Ⅲ・Ⅳ層の黒褐色土は、地形の低い所に限定される。しかも、Ⅲ・Ⅳ層を合せた層厚は、非常に厚い。この違いについては、第７章のまとめで再論したい。

遺物の出土状況をみると（第５図）、全体にまんべんなく分布するのではなく、ある部分にまとまって分布するような傾向がある。地形の高まり上にある溝状の窪み部や、高まりの斜面直下の緩傾斜面に集中分布がみられる。集中分布する部分には、土器や石器がみられるが、第５章で示すように、それぞれ出土レベルや分布状況を異にしている。また、地形の高まり部分には、遺物は散漫に少量分布するにすぎないが、この部分のみに、敲石・磨石類が分布する。狭い発掘区ながら、それぞれの遺物の占地の違いが読み取れる。

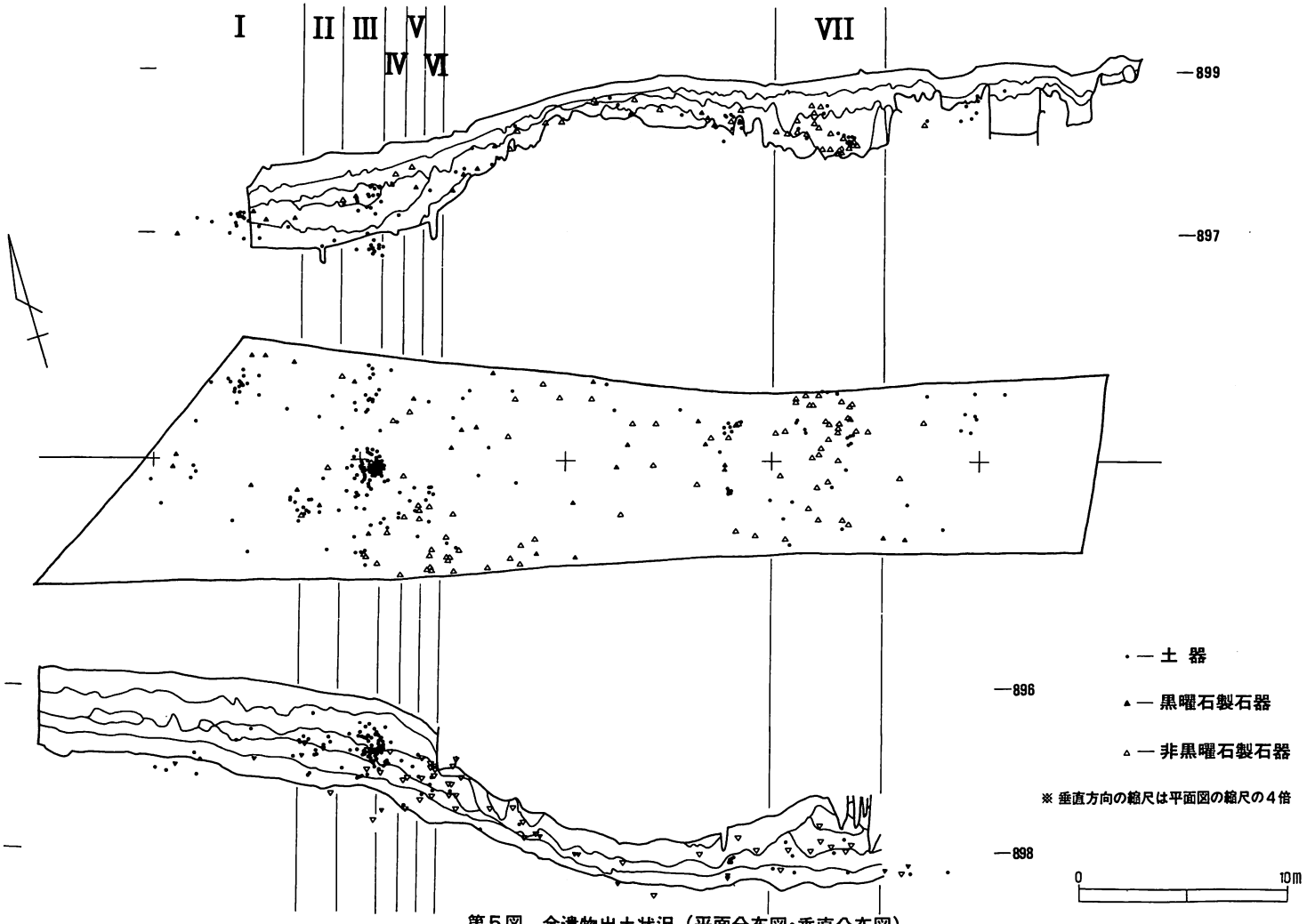
出土層位をみると、大半の遺物がⅢ層以下より出土している。第５図の土層断面図中の遺物分布図は、発掘区中央のグリッド杭（＋印）より北半を北壁に、南半を南壁の土層断面図に、それぞれ投影している。地形は北が高く、南に向って傾斜しているので、北壁に投影した垂直分布はより下位から、南壁のそれはより上位から出ているように見える。しかし、このことを念頭に置いてみると、Ⅲ層以下に遺物の多い状況に見て取れる。また、地形の低い地点では、Ⅳ層中位以下からは、遺物はほとんど出土しなかった。Ⅳ層の存在しない地形の高まりでは、Ⅴ層中より遺物が出土している。地形の高まり部分でのⅤ層は、それ以外の地点でのⅤ層と異



第３図　発掘区北壁土層図



第４図　発掘区南壁土層図



第5図　全遺物出土状況（平面分布図・垂直分布図）

なり、Ⅲ～Ⅴ層に相当する部分をその中に含んでいる可能性が考えられる。

なお、基盤の砂礫層上面の微地形をみると、東端が最も高く、巨礫が多数露出している。その東側は、急斜面で断ち切られる。西側には、浅い溝状の窪みがみられ、幅10mほどで南に傾斜している。発掘区中央付近で地形の高まりがみられ、若干の礫が露出している。高まりは、西側で比較的急な傾斜面をもつ。傾斜面直下で緩傾斜となるが、この部分はかなり幅広い溝状の窪みと思われる。発掘区西端の中央部に礫層が露出するが、この硬層の露出は、道より西側の発掘区へ連続する。この礫層面は、比較的急な角度で、小河川へと連続しているものと思われる。

第５章　遺　　物

第１節　土　器

1. 分　類

中込遺跡で出土した土器片は、縄文時代早期末のものを中心に合計269点であった。以下これらの土器について４群に分類し、説明を加えたい。

第Ⅰ群　縄文時代草創期土器（第６図１～２）

いわゆる爪形文土器が、わずか２点ではあるが出土したので、これをⅠ群とする。

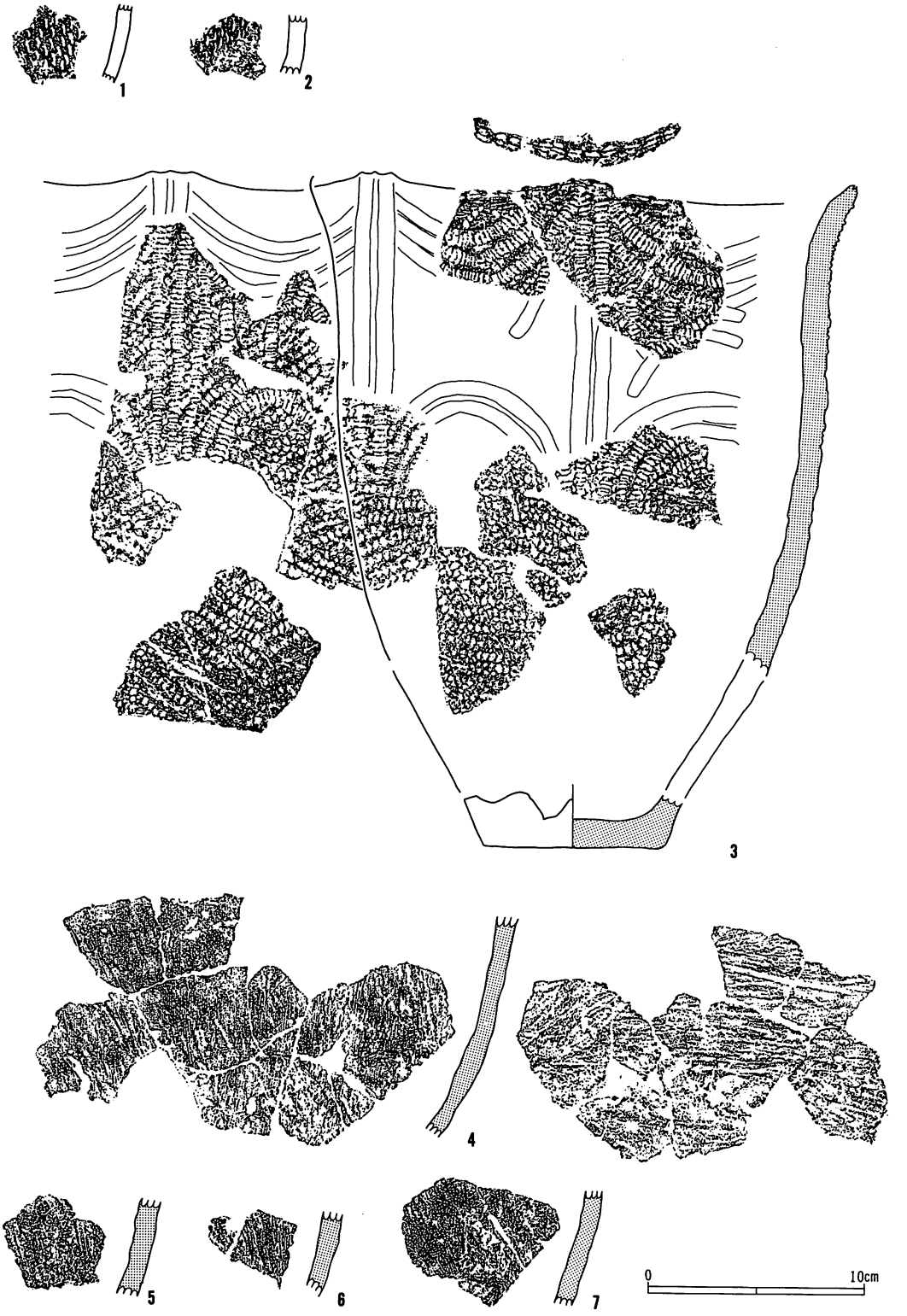
発掘区の東北部から、径50cmほどの自然礫に挟まれるようなかたちで出土した。土器片はいずれも小片であるが、焼成は良好で比較的しっかりしている。爪形の形状は、幅１mm、長さ４～５mm、深さ１mmほどで、横位の帯状構成をとると思われる。色調は赤褐色で、器壁は７～８mmである。胎土には長石・石英・雲母を含み砂質である。

第Ⅱ群　縄文時代早期末～前期初頭土器

本遺跡の中心をなす土器群である。ほとんどの土器の胎土中には繊維が含まれる。大きく５類に分けられる。

１類　絡条体圧痕文を有するもの（第６図３）

絡条体圧痕文が施文されている土器を１類とした。発掘区東部から集中的に出土した。すべて同一個体になると思われる。器形は、８単位の小波状口縁を有し、口縁部がやや外反する。胴部上半はほぼ直線的にのび、胴部下半は緩やかに屈曲し底部にいたる。底部は胎土・焼成・色調などから同一個体として扱ったが、胴部と接合しないため確実に平底になるとは断定できない。口径は25.5cm、底径は8.5cmである。文様はＬＲの単節縄文を地文とし、その上に長さ35～36mmの絡条体を連続的に押しつけて、直線と弧を組み合わせた文様を構成している。まず口縁の波頂部直下にたて方向に直線を描き、器面を８等分したのち、その間を弧で埋めている。口唇部にも絡条体圧痕文が施される。特に波頂部は、絡条体を押しつけることにより３つの波



第６図　中込遺跡出土土器(1)

頭があるような効果をあげている。絡条体は、比較的柔らかいもの（縄か）を軸に、直径1.5㎜ほどの無節の縄を、9本／20㎜の密度で巻き付けている。軸が柔らかいため、圧痕がイモ虫状になっているところもある。口縁部にはこの絡条体をこすりつけた、絡条体条痕文がわずかではあるが認められる。裏面は、口縁部付近をなでている以外はやや荒く、繊維痕が認められる。色調は黄褐色で、胎土には繊維と長石と不透明な小礫を含む。焼成は良好である。

2類　条痕文を有するもの（第6図4～7、第7図8～16、18～19、第8図20～22、28～29）

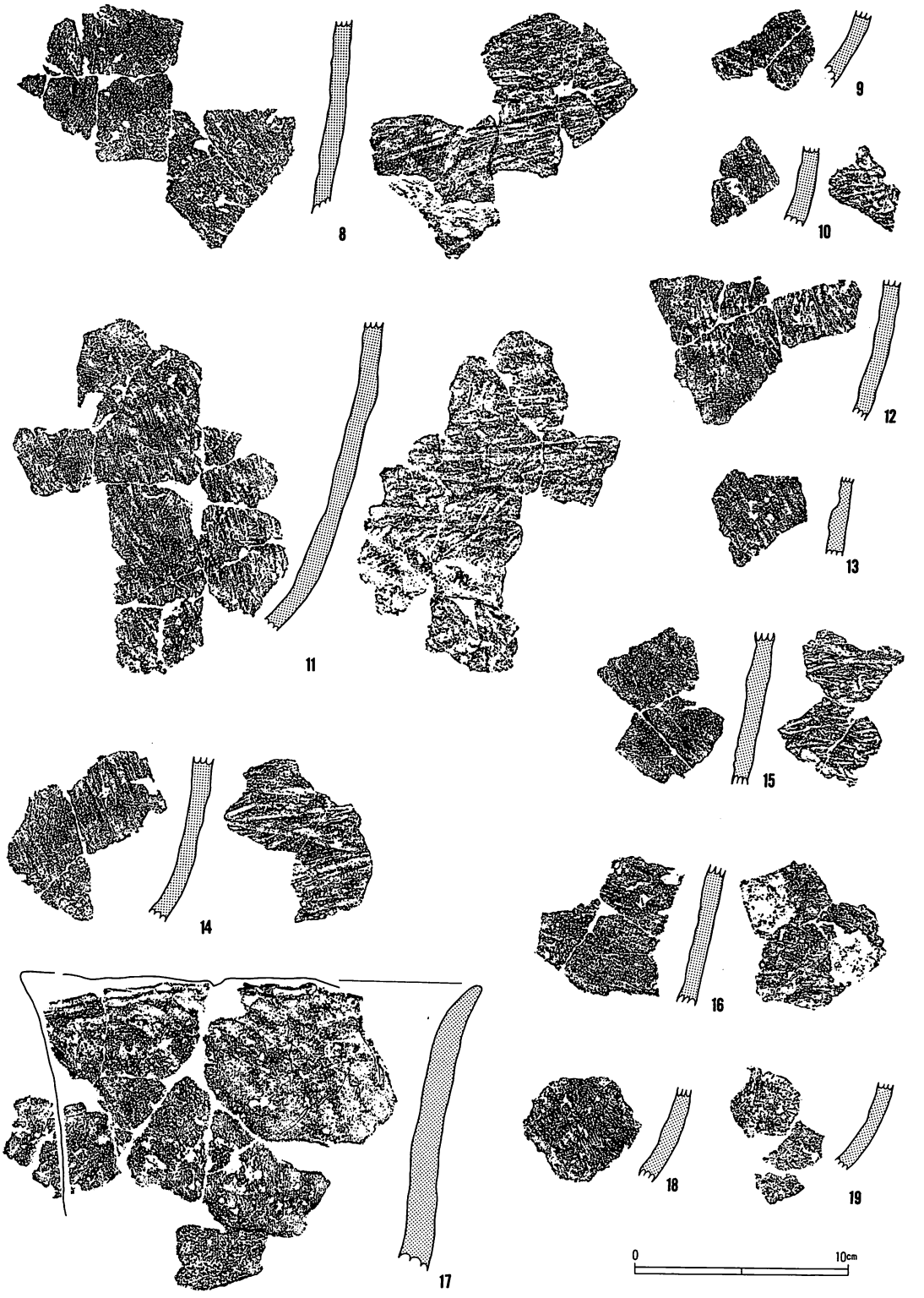
器面に条痕を有するものを一括した。発掘区の中央やや西寄りからまとまって出土した。本遺跡でもっとも多くの出土をみた土器群である。ほとんどの土器が非常によく似ており、多くても3～4個体ではないかと思われる。器形の全容が明らかになるものはないが、4・8・11等から、砲弾形に近い器形が想定されよう。あるいは、20・21がこれの口縁部になるかもしれない。条痕については、土器の表裏で異なる。表面の条痕は、器面に対してやや右斜め下方向に浅く施される。8のように、条痕がはっきりしないものもある。一部に繊維痕を残すが、全体的にはなめらかな感じを与える。施文具は、条痕が細かくて不規則であることから、柔らかい繊維状のものであると考えられる。裏面の条痕は、器面に対して横方向に施文されている。施文具ははっきりしないが、条痕の幅が広く、断面が凹字状になっていることから、硬質のものを使ったと考えられる。色調は赤褐色、胎土には繊維・長石・赤色の小礫を含んでいる。器厚は8～10㎜である。20は口唇部に貝殻の腹縁部を押しつけている。28・29にも貝殻の腹縁部を連続的に押しつけた文様がみられる。裏面の条痕はあまり明瞭ではない。22は直径4㎜ほどの刺突痕が認められる。刺突しながらねじったような痕跡である。裏面には横方向の条痕が残る。

3類　縄文のみを有するもの（第8図23～24、27、30～31）

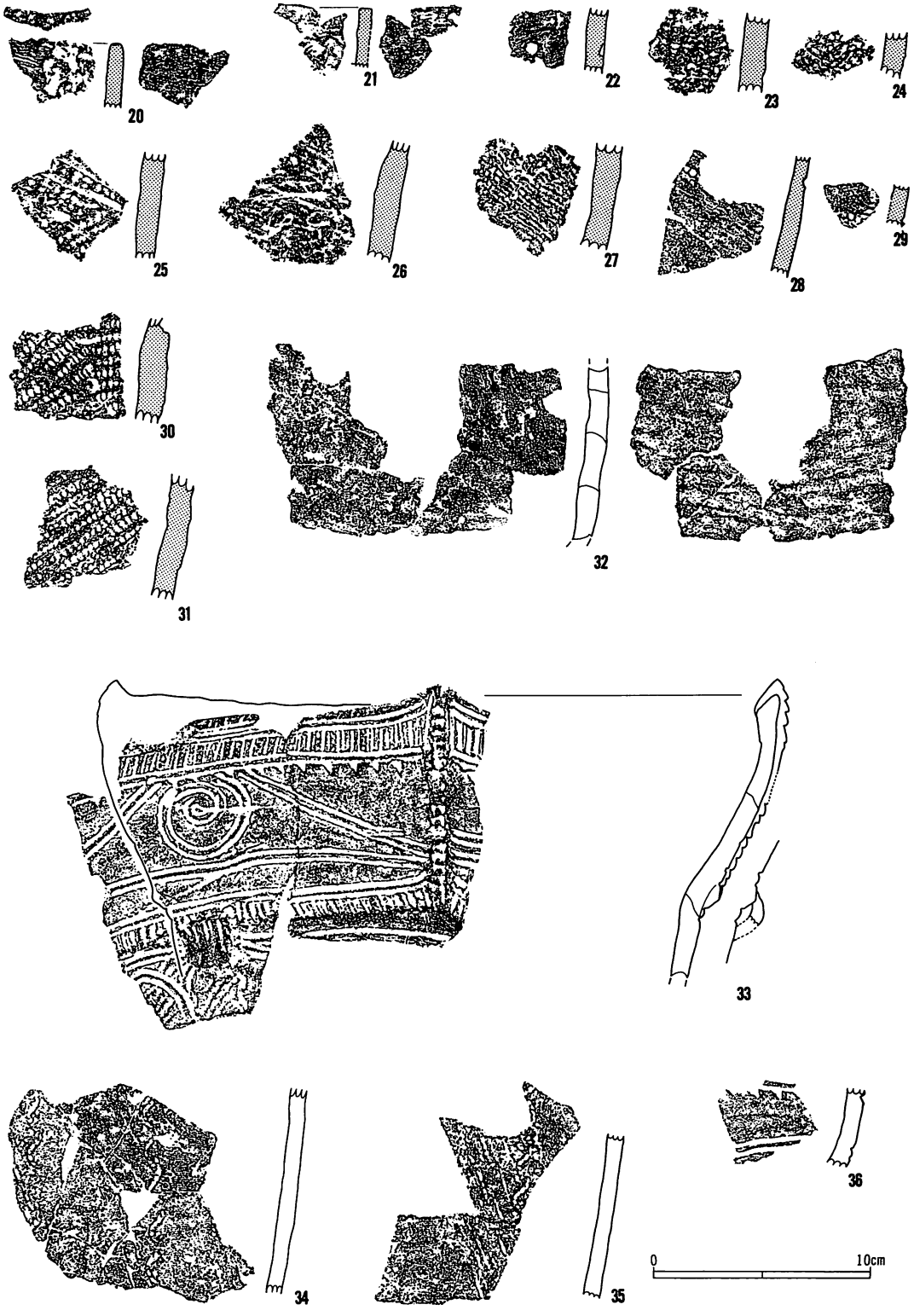
縄文のみが施文されているものを一括した。23・24は小片であり、かつ表面があれているため文様は判然としないが、単節の縄文が施されている。胎土中に繊維と長石を含む。色調は赤褐色である。27はℓの無節の縄文を明瞭に施文している。裏面には指頭痕が残っている。胎土中には繊維・長石・小礫を含む。色調は表面が橙褐色、裏面は黒褐色である。この種の土器はこの一片のみであった。30・31はＬＲの単節縄文を施文している。原体の節はしっかりしているが、施文自体は比較的浅い。乾燥してからの施文であろうか。裏面は繊維痕を明瞭に残している。胎土には繊維・長石・石英・小礫を含む。

4類　縄文の地文のうえに条線を施したもの（第8図25）

わずか一片ではあるが、4類として独立して扱った。ＬＲの単節縄文を地文とし、このうえに幅3㎜、断面凹字状の条線が平行して2本はいっている。浅い条線である。胎土中には繊維と長石が多く含まれる。色調は褐色である。



第７図　中込遺跡出土土器(2)



第８図　中込遺跡出土土器(3)

5類　無文のもの（第7図17、第8図26、32）

表裏ともに無文のものを一括した。17は、口縁部がわずかに外反し口唇部が尖った器形である。器壁は厚いが繊維を多量に含むため脆弱である。金雲母を大量に含んでおり、他の土器とは峻別できる。長石・小礫も含む。色調は灰褐色である。26は表面に繊維痕が明瞭で、胎土中に赤色の小礫を含む。本調査に先立つ試掘調査中に出土したものである。32は輪積痕を残すが比較的丁寧な作りである。表裏ともに軽くなでている。胎土中には繊維を含まず、黒雲母および赤色の小礫を含む。色調は褐色～灰褐色である。この土器は、出土状態と作りからこの群に含めたが、繊維を含まずしかも無文であるので、この群と断定しかねる面もある。

第Ⅲ群　縄文時代中期土器

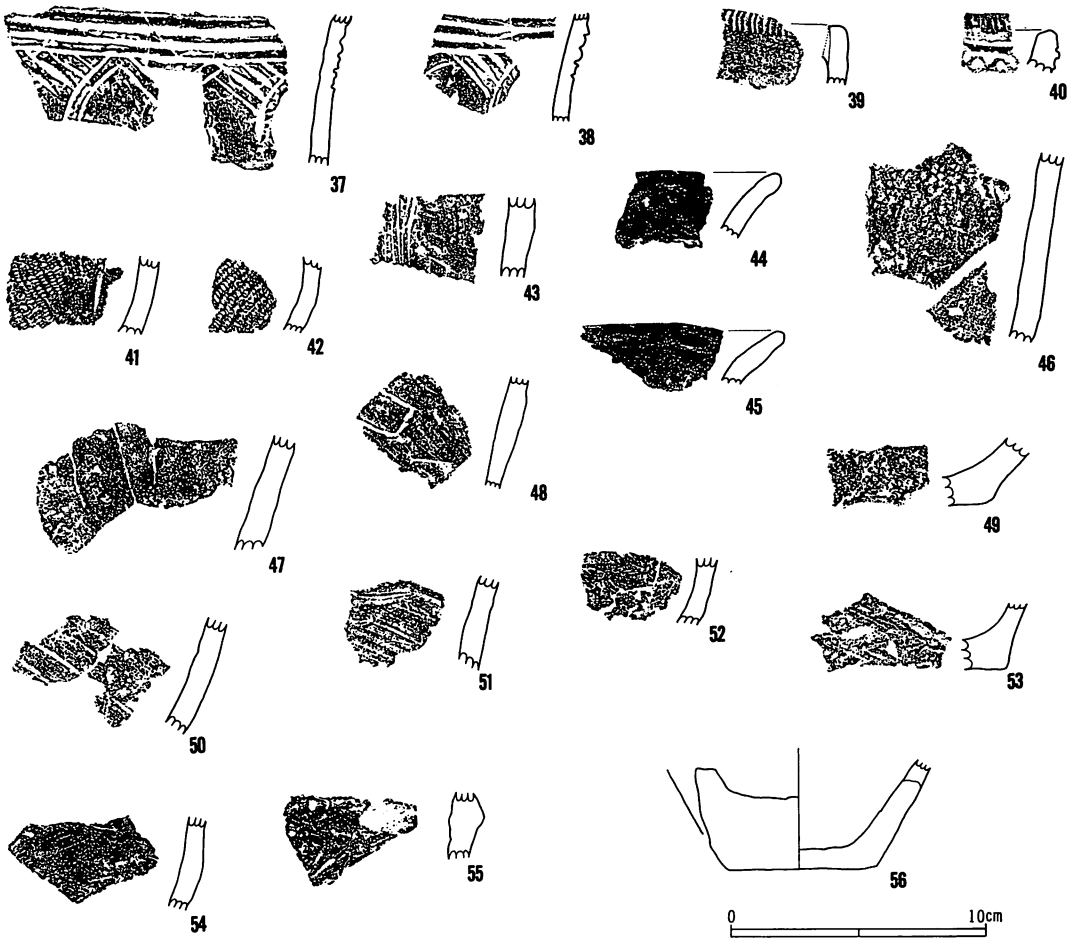
本遺跡における縄文時代中期の土器群は、数量的には少ないが、中期初頭の土器が発掘区南西部からややまとまって出土した。2類に分類できる。

1類　中期初頭の土器（第8図33～36、第9図37～38）

従来の五領ケ台式に比定されるものである。33はこの群で唯一器形の知れるものである。底部から胴部にかけては直線的にのび、胴上半部で屈曲してひらき、口縁部がやや内湾する。口縁の内側は「く」の字状に肥厚する。4単位の小波状口縁を有する。文様の構成は、屈曲する部分を境に胴上半と下半で異なる。上半部は粘土紐のはりつけによる隆帯と、半截竹管による沈線で構成されている。波頂下に下ろした隆帯で器面を4分割し、その間に半截竹管をつかった平行沈線で幾何学文様を描いている。隆帯上にはやはり半截竹管による押し引き文が施されている。隆帯の脇には連続する刺突文もみられる。これに対して胴下半部は、ＲＬの単節結節縄文をたて方向に転がして地文とし、その上に半截竹管による「Ｙ」字状文を施文している。さらに、屈曲部には橋状把手が添付されている。胎土にはこの時代に特徴的な金雲母を多量に含む。色調は黒褐色である。なお、36は、図面上では分けてあるが33と接合している。34・35は、結節縄文がたて方向に施文されたものであるが、器面が乾いてからの施文なのか、浅くてはっきりしない。胎土には金雲母と石英を多量に含む。裏面は胎土のせいか、ザラつきが著しい。色調は赤褐色である。37・38は幅7㎜ほどの半截竹管により、横位の平行沈線と、やや変形の「Ｙ」字状文を施文している。胎土・色調・器厚などから、34・35と同一個体と思われる。

2類　中期中葉の土器（第9図39～42）

中期中葉の土器群は、小砕片が数点出土しているにすぎず、内容的にも乏しいものである。39・40はいずれも口縁部である。口唇部に面を取り、そこに半截竹管による連続押し引き文を施している。胎土中には、金雲母を少量と長石を含む。色調は褐色である。41・42はＬＲのよくしまった単節縄文を施文して沈線で区画し、外側を丁寧に磨り消している。裏面はよく研かれてなめらかに仕上げてある。胎土中には長石を少量含む。これらの土器はいずれも勝坂期の所産であろう。



第９図　中込遺跡出土土器(4)

第Ⅳ群　縄文時代後期土器（第９図44、45、47～50）

縄文時代後期に属する土器は、形や模様の復元できるものが少なく、分類することが難しいと思われたので、一括して取り扱った。

44・45は、表裏ともに黒色で、非常によく磨かれている。口縁部は、一度小さくくびれて、先端部が若干肥大する。口縁部が大きく外反する器形であろう。胎土には長石と赤色の小礫を含んでいる。47・48・50は、明るい褐色で胎土に小礫を含む。表面には沈線が施されている。56は底部で、色調・胎土は、47～50と同様である。

所属不明の土器

第Ⅰ群～第Ⅳ群のいずれに含められるか不明なものがあるので、これらのうち図版に掲げられたものについて、ここでまとめて説明を加えておきたい。

43は表面に幅１～２㎜の沈線文が不規則に数条施されている。沈線の断面は「Ｕ」字状で浅い。一度に数条を施文している。裏面はなめらかに調整されている。色調は橙褐色で焼成は良

好、全体的に堅緻な感じを受ける。46・49は表裏ともに無文であるが、細かいひび割れがみられる。色調は灰褐色で、胎土に砂を多く含む。非常に質感のある土器である。両者は同一個体であろう。51は表面に刷け目様の細かい沈線が施されている。条痕文として扱うことも可能であるが、他の条痕文とはだいぶ様相を異にするため、ここに含めておいた。色調は褐色で、胎土には小礫を多く含む。焼成は良好である。53・54・55は表裏ともに無文で色調は明褐色である。

2. 分　布

本遺跡からは遺構が検出されなかったので、出土遺物はすべて包含層からである。全点プロットで調査を進めたが、層位的発掘はできなかったので、遺物と層位との照合は、あくまでも理論上のものである。これらのことを前提にして、土器の平面分布と垂直分布について検討したい。

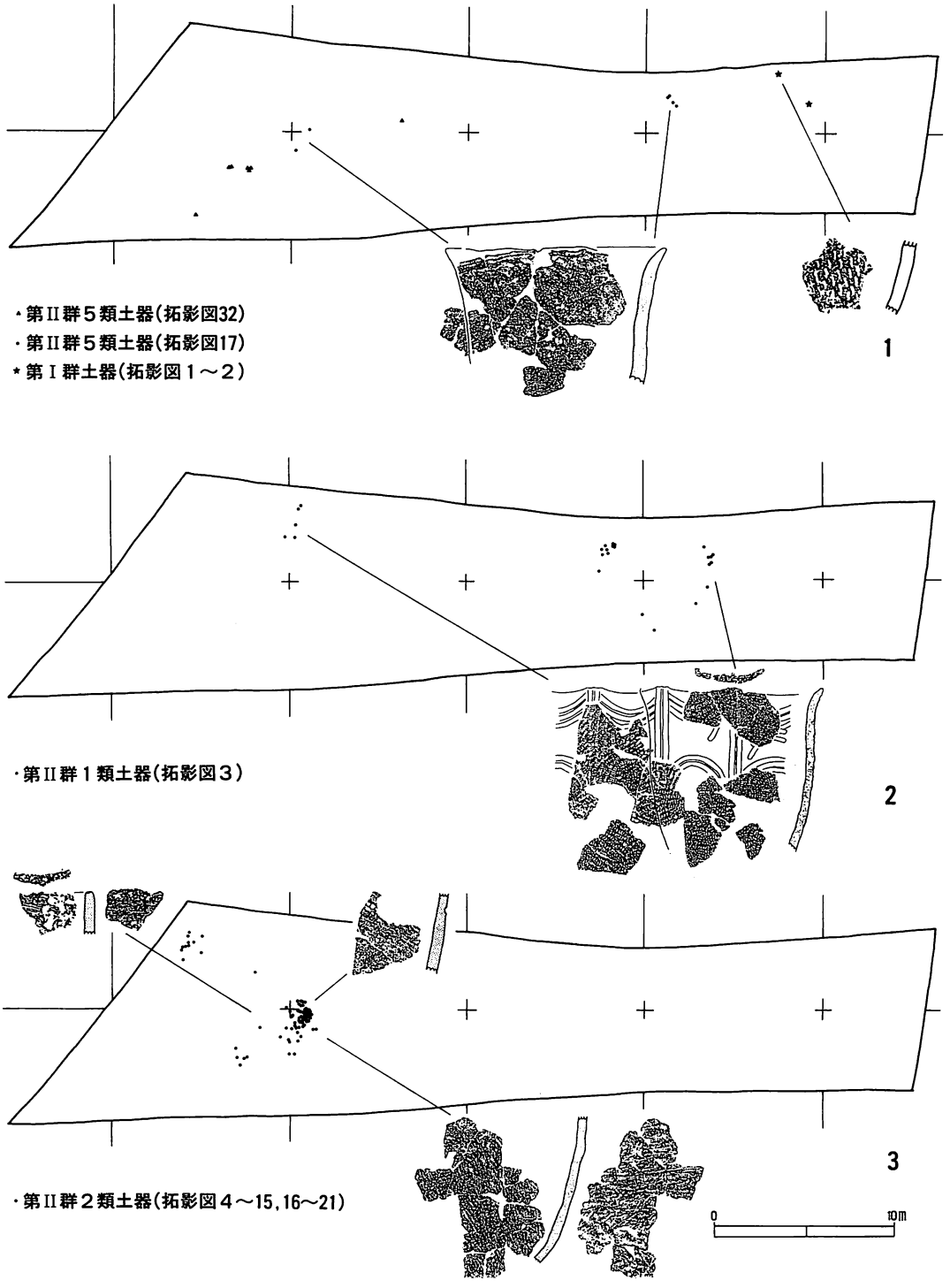
第５図に石器と土器の全点分布を示した。土層図に投影したドットは、発掘区を南北に二分して、それぞれ北壁と南壁へ投影した遺物の垂直分布を示している。群・類ごとに分けて示した平面分布図は、第10図１～３と第11図４～６である。さらにその垂直分布図を第12図～第13図Ⅰ～Ⅶに示した。ただし遺跡に高低差があるため、東西方向に短く区切った範囲の土器を、西方向へ見通している図である。なお、このⅠ～Ⅶは、全体の平面分布図（第５図）中のⅠ～Ⅶの範囲に対応し、図中の数字は土器拓影図の番号を示す。

まず全体の平面分布図からみてみると、分布の集中が中央の鞍部を境にして、東西に大きくふたつに分かれることがわかる。中央の鞍部は分布が希薄である。東西の集中部は、どちらも中央の鞍部からつづく斜面にあたり、地形とのかかわり方に法則性が考えられるようである。群・類別の分布をみてみると、これらはさらにいくつかのまとまりに分けられることがわかる。

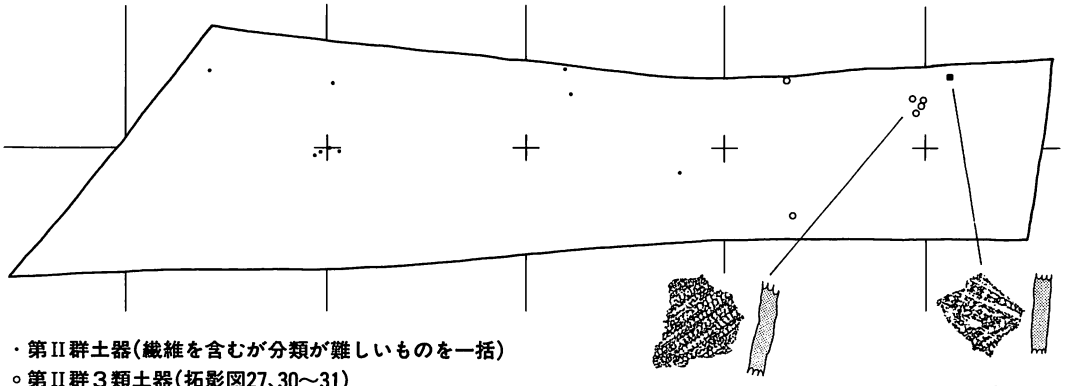
第Ⅰ群土器（第10図１）は、東側の群のなかでももっとも東側から出土している。この位置は、土層図でみてもわかるように、中央の鞍部から一度低くなった地形が、再び高まりを見せるところである。この東側はすぐに崖となって、古杣川が流れている。韮崎岩屑流にともなう礫が浅い位置にみられ、土器片はこの礫に挟まれるように出土している。分布状況からみても地形的にみても、独立した位置に分布していると言える。

第Ⅱ群土器は、全体的にみると東西のどちらにも分布しているが、類ごとにみると分布が異なる。絡条体圧痕文を有する１類土器（第10図２）は、口縁部から胴部の主たる部分が東側から、底部は西側から二分して出土している。このことは、この土器が平底であるか否かを考えるうえで重要である。垂直分布図をみてみると、東側に分布するものは第Ⅲ層（黄褐色）の下の褐色土層から出土しているが、西側に分布するものは、第Ⅳ層内とそれよりも上層から出土する傾向がある。後述するが、第Ⅲ層以上からは主に中期以降の土器が出土するので、分布から考えると両者は別個体の可能性が強いということになる。また、東側の一群は、ほぼ同一円周上に分布が広がり、しかもほとんど接合することは興味のある事実である。

２類土器（第10図３）はすべて西側に集中する。さらに北西側の集中部と中央側の集中部と

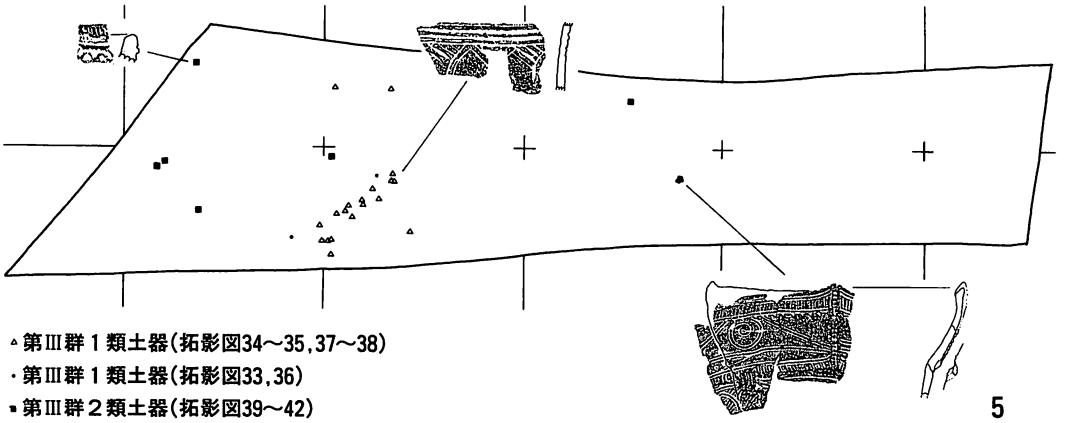


第10図　土器平面分布図(1)



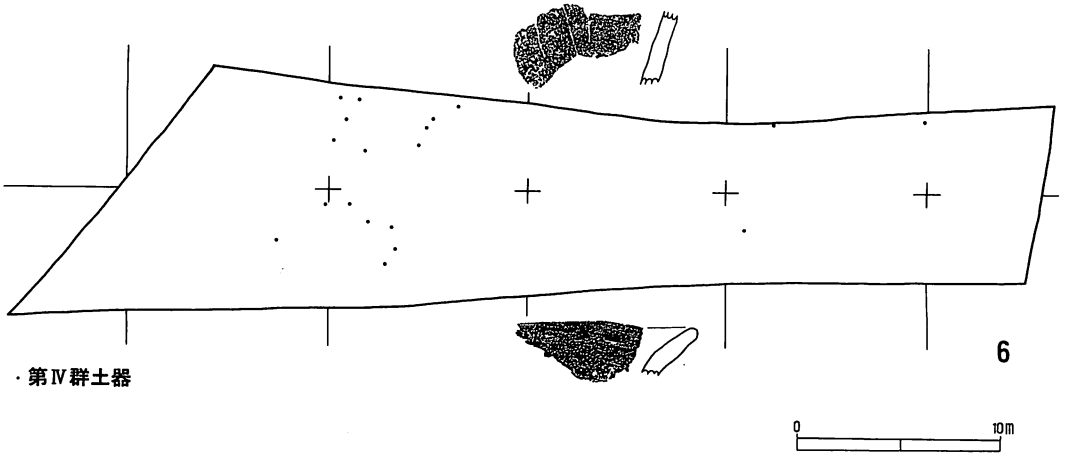
・第II群土器(繊維を含むが分類が難しいものを一括)
○第II群３類土器(拓影図27、30～31)
■第II群４類土器(拓影図25)

4



△第III群１類土器(拓影図34～35,37～38)
・第III群１類土器(拓影図33,36)
■第III群２類土器(拓影図39～42)

5

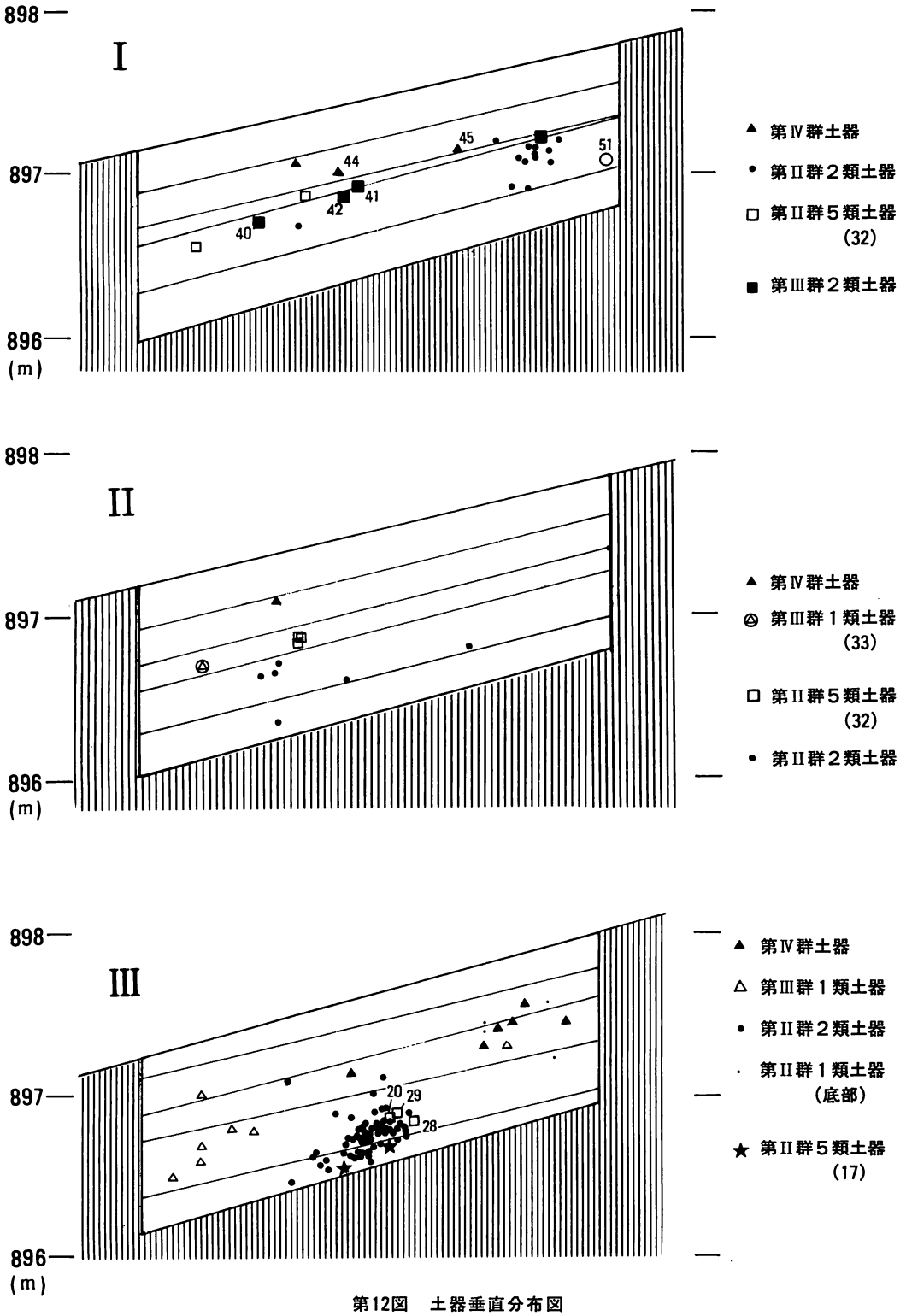


・第IV群土器

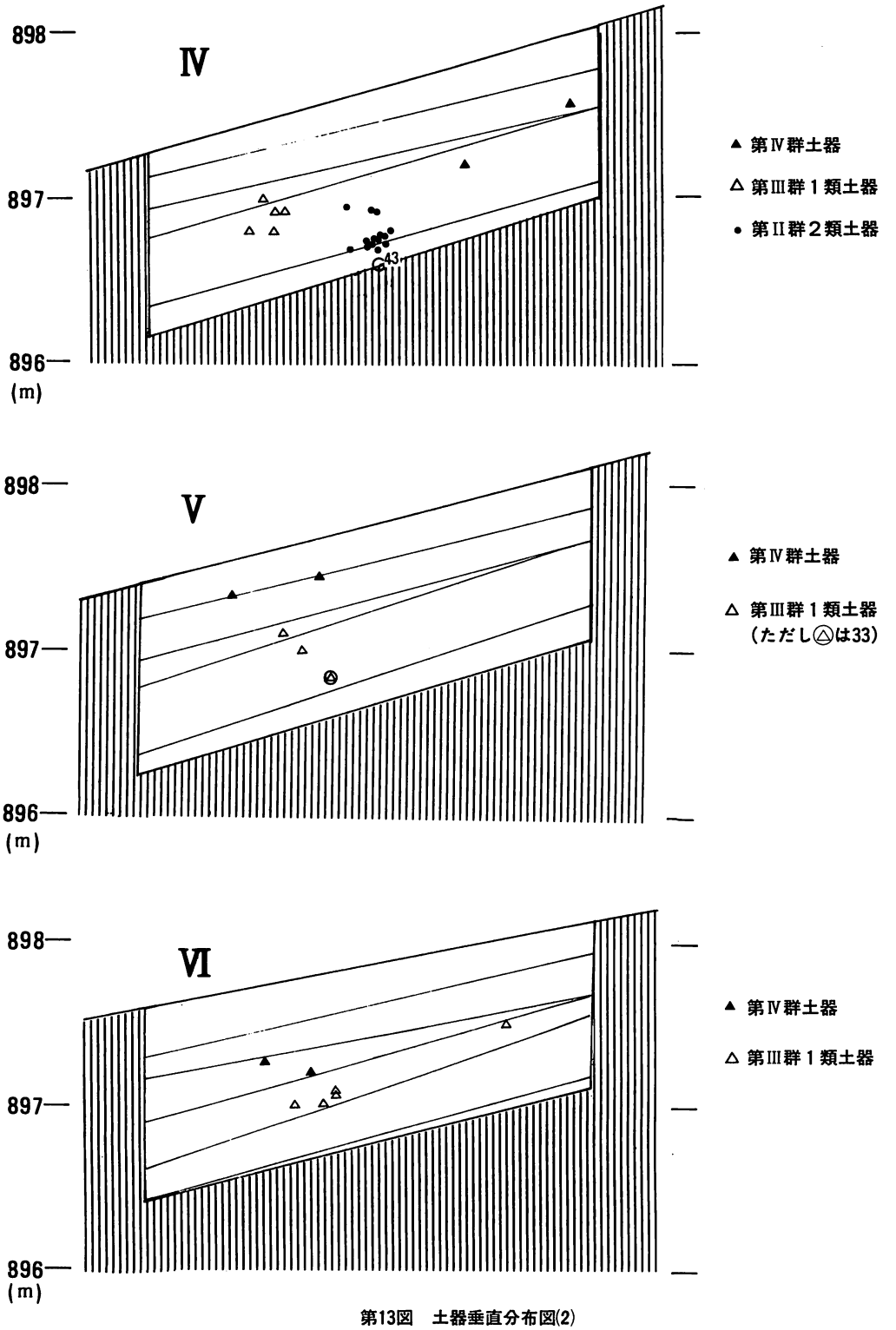
6

0　10m

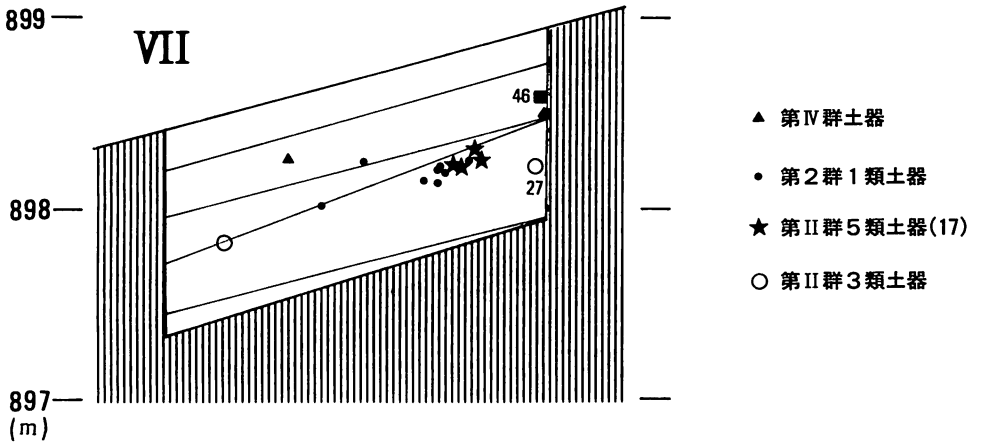
第11図　土器平面分布図(2)



第12図　土器垂直分布図



第13図　土器垂直分布図(2)



第14図　土器垂直分布図(3)

の2つに分けられる。最も密集する中央側の集中部は、平面だけでなく垂直面でも重なりあうように分布しており、一括遺物としてとらえられよう。この中には、拓影図中の20・28・29といった貝殻復縁文の施文されている土器が含まれている。2類の土器はほとんどが、第Ⅳ層の深い部分より出土しており、年代を考えるうえで重要な手がかりとなりうる。北西の集中部の土器は、中央の集中部のものよりも若干浮いている感もあるが、同じ第Ⅳ層のなかに収まり、誤差も考え合わせると大きな時間差は考えにくい。ほぼ同時期のものとして扱ってよいであろう。

3類・4類（第11図4）は2類とは逆に、東側に分布する。土壌堆積が薄いため垂直分布からは情報が得にくい。図面も割愛した。

5類（第10図1）は個体により分布が異なる。拓影図17の土器は、東西に分かれて分布するが、接合するため、東西の土器群の関係を考える手がかりとなる。第12図Ⅲをみると、17の土器は、第Ⅱ群2類の土器と同位、若しくはやや下層から出土している。したがって17は2類土器と同時期かそれ以前の土器と考えられる。ひるがえってⅦをみると、17の土器は第Ⅱ群1類の土器や同3類の土器とほぼ同一の層序から出土している。さらに第12図Ⅲと第13図Ⅳの層序はそれぞれ対応することから、第Ⅱ群土器には、層序的なうらづけのない4類を除いて、1類から5類まで、それほど時間幅がないのではないかと考えられる。32の土器については、第Ⅲ層から出土していて、しかも胎土中に繊維を含んでいないことから、あるいはこの群に入れないほうがよいかもしれない。

第Ⅲ群1類土器（第11図5）は、2個体あると考えられる。拓影図33は第11図5で示したように、発掘区中央やや東寄りから集中して出土した。しかし、これと接合する2片が鞍部を挟んだ西側より出土している。この周辺には、1類のもうひとつの個体である34・35・37・38が集中的に出土しているので、これら2個体は、同時期に同じ集団により廃棄された可能性もある。34・35・37・38を垂直分布図（Ⅱ～Ⅵ）でみてみると、やや幅をもって分布しているが、ほとんどは第Ⅳ層から出土している。33の土器もおなじ範囲に収まって、近いところから出土

していることから、やはり時間差は少ないと思われる。なお、33の土器については、東側の集中部付近の土壌堆積が薄く、比較の資料にならないため、垂直分布図は割愛した。

2類の土器（第11図5）は西側にのみ分布するが、小砕片が疎らに分布しているにすぎず、これといった傾向はつかめない。垂直分布では（Ⅰ）、すべて狭い第Ⅲ層に集中しており、第Ⅳ層の下層に集中する第Ⅱ群の土器と比べると、層位的にも新しいものであると言える。

第Ⅳ群の土器は、中央から西側に多く分布する（第11図6）。しかし、いずれの破片も小さく接合もほとんどしないため、まとまりがとらえにくい。垂直分布図をみてみると、第Ⅳ群の土器は、例外なくⅢ層よりも上層から出土している。第Ⅱ群がⅣ層から、第Ⅲ群がⅢ層とⅡ層から出土していることから、層位的にも、この時期に属することが裏づけられる。

以上、第Ⅰ群から第Ⅳ群に属する土器の分布をみてきたが、所属不明の土器で、注目すべき土器についてふれておきたい。拓影図43の土器は、第Ⅱ群2類土器が集中的に出土した地点で、これらの土器よりも下層から出土した（第13図Ⅳ）。また、51の土器は、発掘区北西角で、第Ⅱ群2類土器と同一の層から出土した（第12図Ⅰ）。このことから、層位的にみれば、2点はいずれも第Ⅱ群の土器に含めることができるかもしれない。

3. まとめ

(1) 編年的位置付けについて

第Ⅰ群の爪形文土器は、爪形の形状・胎土等から、草創期に属するものとしてまちがいない。年代では、テフラの分析結果から（付編参照）、13000年前より新しいことが分かっている。県内では他に出土例がないが、群馬県の下宿遺跡出土のものと類似性が認められるようである。[7] 県内の歴史の空白をうめる一助となりそうである。今後の類例の増加を期待したい。

第Ⅱ群土器は、最も注目すべき内容を含んでいる。とくに1類の土器は重要である。近年絡条体圧痕文を有する土器は、従来の「イコール子母口式」という理解を脱して、早期末に位置付けられる一群が存在することが明らかになってきた。このような中で、中込遺跡の絡条体圧痕文土器は、以下の4点において注目される。

① 地文に縄文が施文されている。

② 軸のやわらかい絡条体を使用している。

③ 文様構成が直線と曲線を組み合わせた特徴的なものである。

④ 底部が平底になる可能性がある。

このような類例は長野県や新潟県にもみられるようであるが、数量的には少なく、編年的位置の詳細も明らかになっていない。くわしく触れている余裕はないが、絡条体圧痕文がある時間幅をもって存在することが予想される中で、比較的新しい要素が多いのではないかと考えている。とくに、縄文を地文とするもの、絡条体条痕文を地文とするものについては、この辺りの事実を明らかにするため、今後の注意が必要であろう。次に、この絡条体圧痕文土器とほぼ同時期のものではないかと考えられる、第Ⅱ群2類・5類土器であるが、多くのものが条痕の

みあるいは無文のため、編年的位置は具体性にかける。そのような中で、20・28・29の土器には貝殻腹縁による施文がみられ注目される。関東地方の、いわゆる「打越式」に類似する。「打越式」は東海地方の、入海Ⅱ式～天神山式に併行するのではないかとされており、中込遺跡第Ⅱ群土器の編年的位置を知る鍵となろう。その外の2類土器も、裏面の調整が貝殻である可能性がある。総じてみると、第Ⅱ群土器の編年的位置付けは、早期最終末からその一歩手前にあたえられるのではないだろうか。なお、群類分けの項では、Ⅱ群土器を早期末～前期初頭とした。これは、3類・4類の土器の編年上の位置付けが難しく、前期に含まれる可能性も残されていると判断したためである。

第Ⅲ群土器・第Ⅳ群土器については、編年的にはそれぞれⅢ群1類が中期初頭、2類が中期中葉、Ⅳ群が後期前半ということで問題はなかろう。

(2) 胎土について

中込遺跡の土器中に含まれる鉱物片は、時代ごとに差異があるものの、石英粒子を含んでいるものが多い。ところが、八ケ岳山麓には花崗岩はまったくみられず、土器に含まれるような石英粒は付近には存在しない。したがって、ここから出土した土器は、他所からの搬入である可能性が強い。ではどこからということになるが、正確な胎土分析をしていないので何ともいえないが、甲府盆地の東部、あるいは釜無川（富士川）流域が、考えられる候補であろう。表面的な様相からは、甲府盆地東部のものに近いという。[8] いずれにせよ、持ち込みの土器が多いということは、この遺跡の性格付けをするうえで見逃せない点である。

(3) 層位との関連について

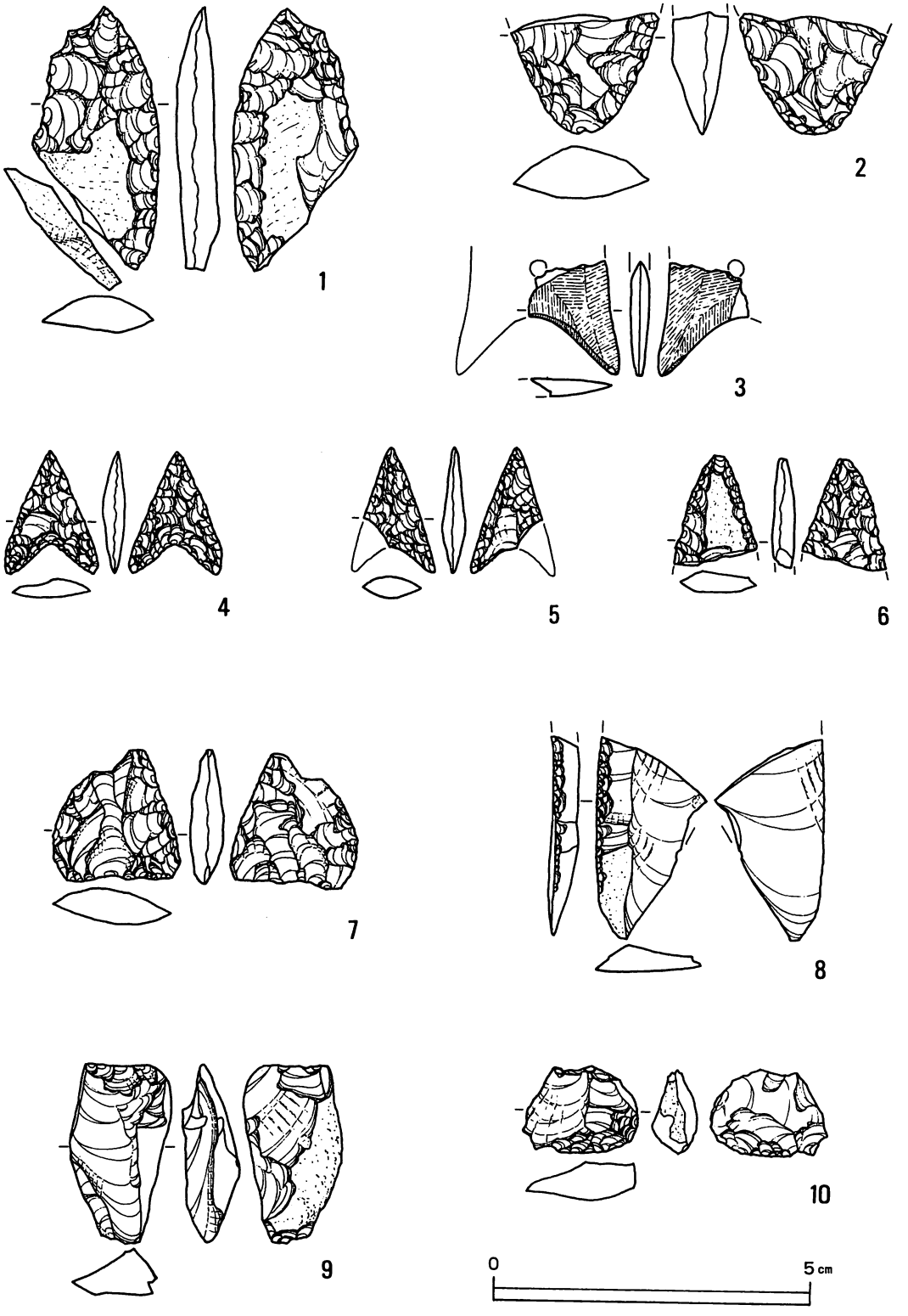
あくまでも概してであるが、次のようなことが言えるのではないだろうか。第Ⅳ層は、縄文時代中期初頭までの土器群を含む。第Ⅲ層は、中期から後期の土器群を含む。第Ⅱ層、第Ⅰ層は後期以降の土器を含む。中込遺跡の層序は、八ケ岳南麓にある程度普遍的に認められるので、このようなデータが積み重ねられることが、この地域の歴史を再構成するうえで重要であろう。

第2節　石　器

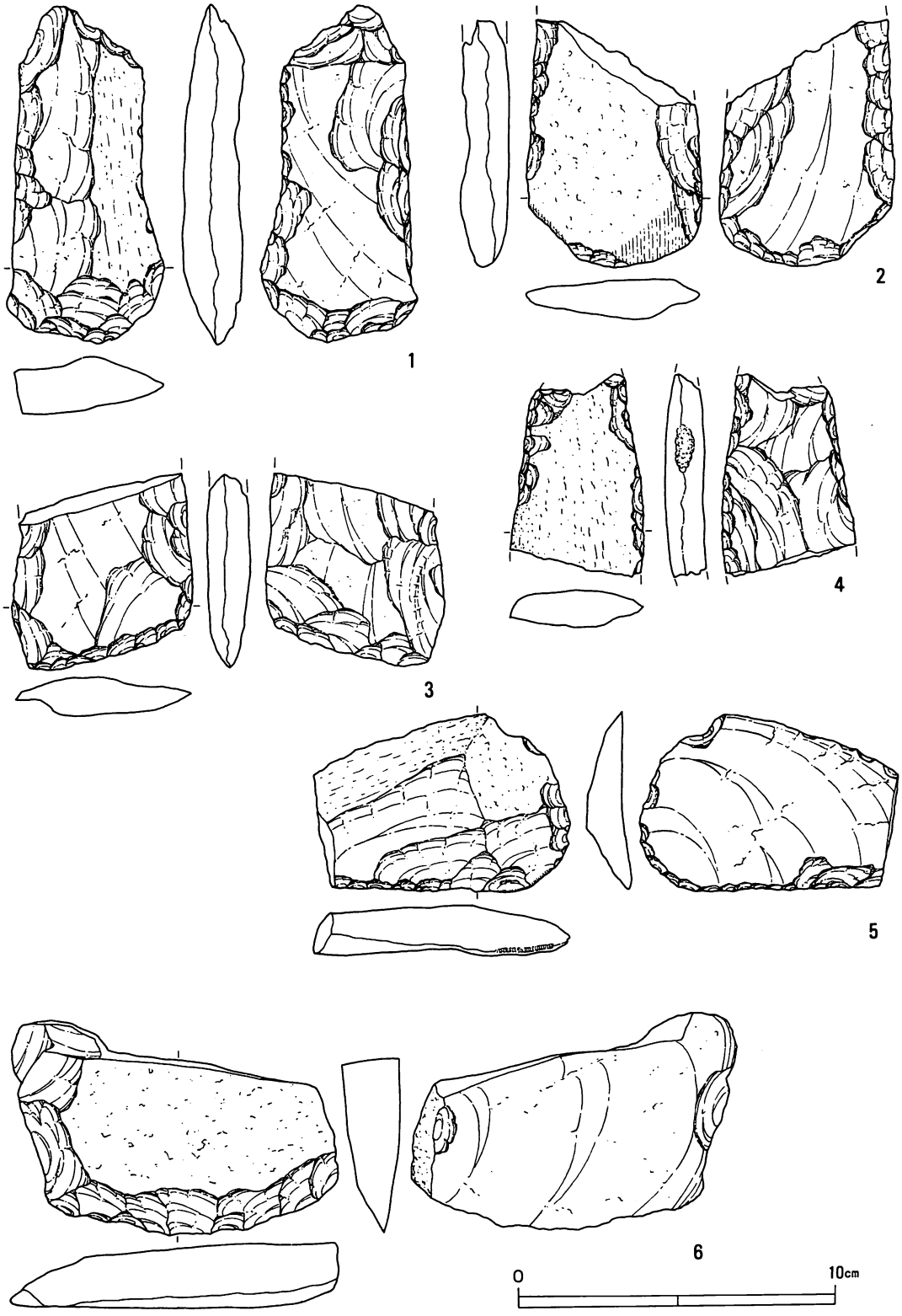
1. 器　種

本遺跡から出土した石器は、石槍2点、石鏃4点、楔形石器2点、加工痕ある剝片4点、打製石斧9点、横刃型石器2点、礫器1点、敲石・磨石類8点、くぼみ石1点、磨製石鏃1点である。また、黒曜石石核6点、同剝片25点、同砕片44点、堆積岩系石材の剝片・礫片7点が出土した。

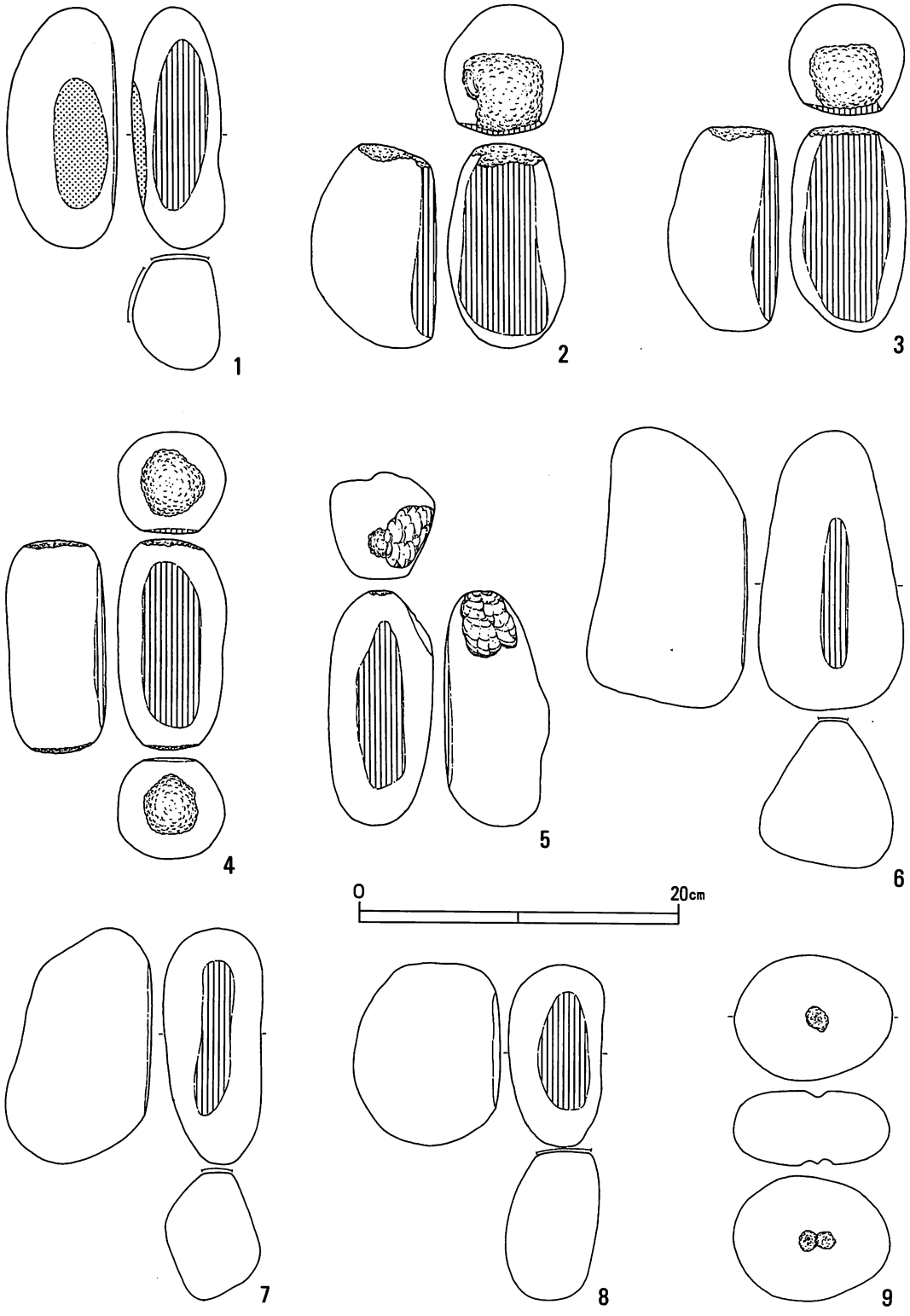
石槍（第15図1・2）　1は、黒曜石の剝片状のいわゆるズリ石を素材にしたものである。素材周辺部に平担剝離がなされているが、両面とも中央部に自然面を残す。基部は自然面であるが、節理面の可能性もあり、基部を欠損するものと見ることも可能である。1989年度の試掘調



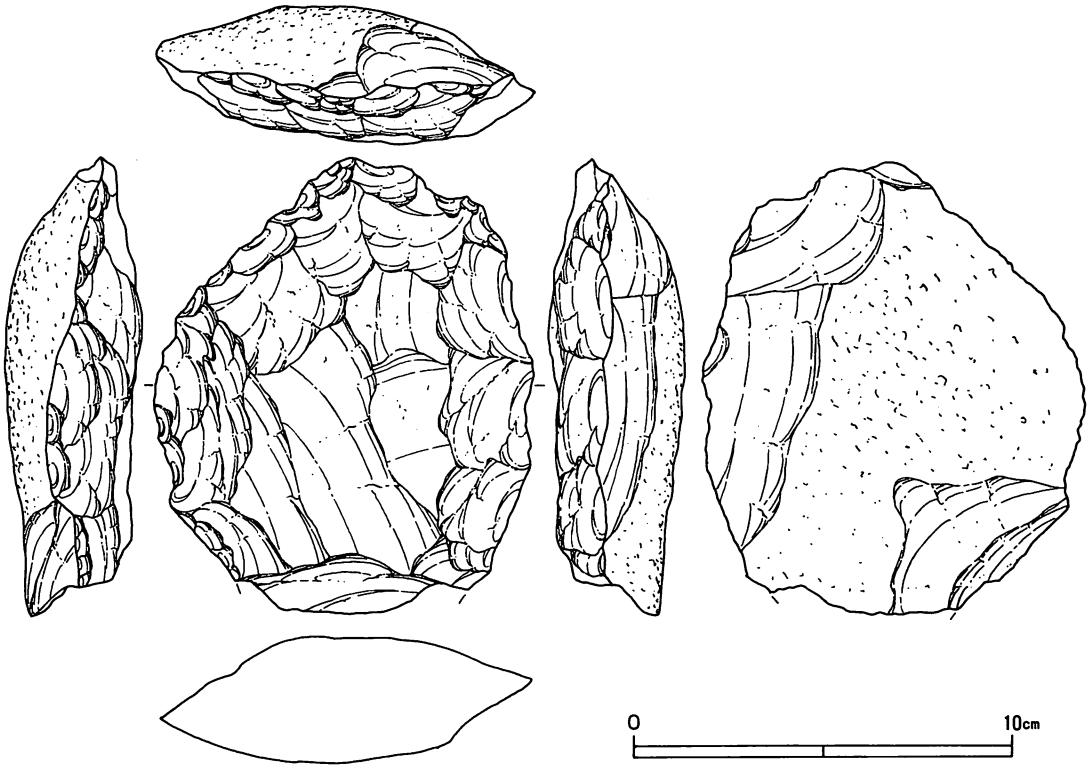
第15図　中込遺跡出土石器(1)



第16図　中込遺跡出土石器(2)



第17図　中込遺跡出土石器(3)



第18図　中込遺跡出土石器(4)

査時に出土。2は、やはり黒曜石製で、両面に素材剥離面が残っており、剥片素材と思われる。やや厚手で、基部が丸く仕上げられている。本遺跡には、先土器時代遺物の入るような土層は存在しないので、この二者は、縄文時代のものと思われる。

磨製石鏃（第15図3）　粘版岩製で、かえりの部分の破片である。かえり部は、やや外側に出るらしい。その内側は、急角度に仕上げられ、刃潰しされている。中央の穴の一部が残存する。弥生時代後期のものと思われる。

石鏃（第15図4～7）　無茎の凹基鏃(4・5)が2点、平基鏃(7)が1点、先端部の破片(6)が1点である。7は、やや不定形であるが、基部中央からの剥離で左側縁の先端部付近を欠損させているにもかかわらず、その後も右側縁の調整を行っているので、完成品と考えられる。いずれも黒曜石製である。

加工痕ある剥片（第15図8）　薄い縦長の黒曜石剥片の左側縁部に、浅い調整がなされたものである。この他に3点あるが図示しなかった。

楔形石器（第15図9・10）　9は、長軸の両端に破砕痕がみられる。10は、小剥片の両側縁に破砕痕がみられる。いずれも、黒曜石製。9は、石核の可能性もある。

打製石斧（第16図1～4）　いずれも短冊形の打製石斧である。刃部は、1・2が弧刃、3が傾斜した直刃である。4は刃部を欠損する。2は、刃部に、それに直行する方向の擦痕がみられる。1・2が砂岩、3・4がホルンフェルス製である。他に、ホルンフェルス製の打製石斧

片が5点出土している。

横刃型石器（第16図5・6）　5は、破岩製の薄い剝片の側縁部に浅い調整を行ったものである。刃部の一部に摩耗して丸くなった部分がある。6は、ホルンフェルス製のやや厚手の剝片を利用したもので、かなり深い調整がなされている。これは、後述する礫器の部類に入る可能性もある。

礫器（第18図）　背面に広く自然面をもつ厚手の剝片を利用したと思われる。背面側の一部に平担で大規模な剝離を行った後、周縁部に深い調整を行って、刃部を形成している。末端部は、背面側からの剝離で欠損しているが、調整された刃部は一周していた可能性がある。ホルンフェルス製である。

敲石・磨石類（第17図1～8）　非常に平滑な磨り面をもつもの（1；図中網点部分）、礫の長軸方向に、周縁部に稜を形成するような面を成し、粗い磨り面をもつもの（2～8；図中斜線部）とがある。また、石の小口に敲打痕をもつもの（2～5）があり、5は敲打部分が破砕して、剝落している。石材は、5が石英閃緑斑岩で、他は全て輝石安山岩である。輝石安山岩は、八ケ岳山麓で広くみられ、遺跡付近で容易に入手できるが石英閃緑斑岩は、八ケ岳山麓ではみられない石材である。

くぼみ石（第17図9）　扁平な円礫の広口面中央部に、1カ所ないし、連続する2カ所のくぼみを付けたものである。輝石安山岩製である。

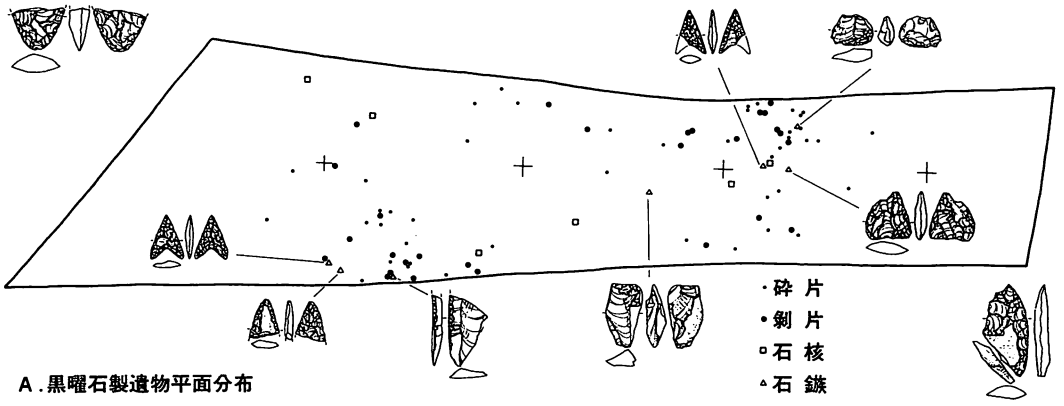
この他、石核、剝片などが出土しているが、図は割愛した。黒曜石製の石核は、長さ2～3cm程度の小型のものばかりで、多方向から剝片を取っている。堆積岩系石材の剝片は、長さ4～9cmほどのもので、かなり大型のものもある。砂岩、粘板岩、泥岩といった石材である。また、礫片には、砂岩、泥岩があり、多方向から加撃され、節理面で割れた状態のもので、数cm角のものである（図版6）。

2. 分　布

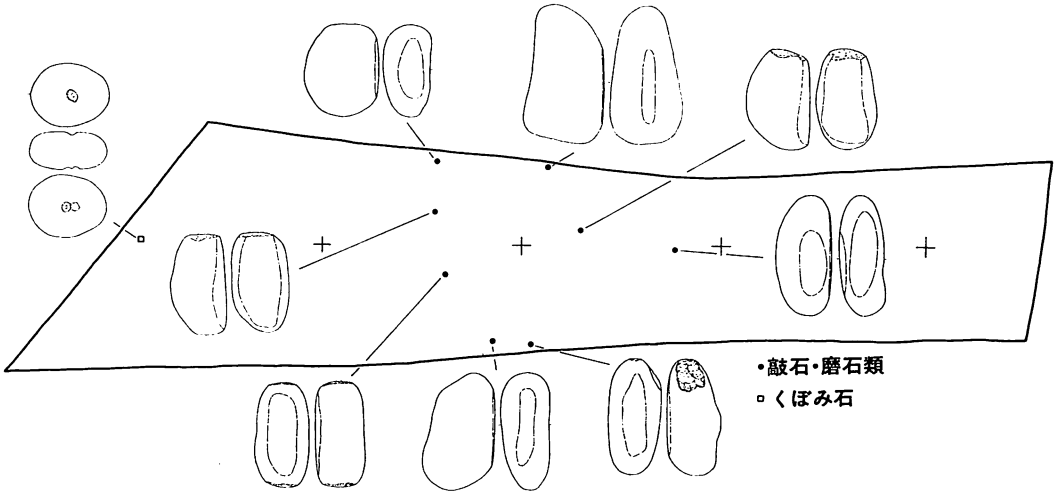
第19図上段は、黒曜石製遺物の分布を示したものである。発掘区北東部と南西部の二カ所に、目立った分布の集中がみられる。両者は、占地する地形に違いがみられる。北東部の集中は、地形の高まり上にある溝状の窪みの中に位置する。この部分には、早期末より後の時期の土器がみられない。また、第20図Ⅶの垂直分布図でみるように、土器群よりも深いレベルから出土しているものが多い。早期末よりも古い時期に所属する可能性がある。

一方、南西部の集中は、地形の高まりを下って、地形傾斜が緩やかになる、地形の変換点付近に位置する。第20図Ⅲや第5図の垂直分布図でみると、Ⅲ層を中心に分布がみられる。Ⅳ層中部付近を中心に分布する北東部の集中と較べ、層位的に浅い位置を中心に分布しているようにみえる。また、付近に分布する早期末の土器群よりも、明らかに浅いレベルより出土している（第20図Ⅲ）。中期初頭の土器群とのレベル差はあまりみられず、この時期に近いものと思われる。

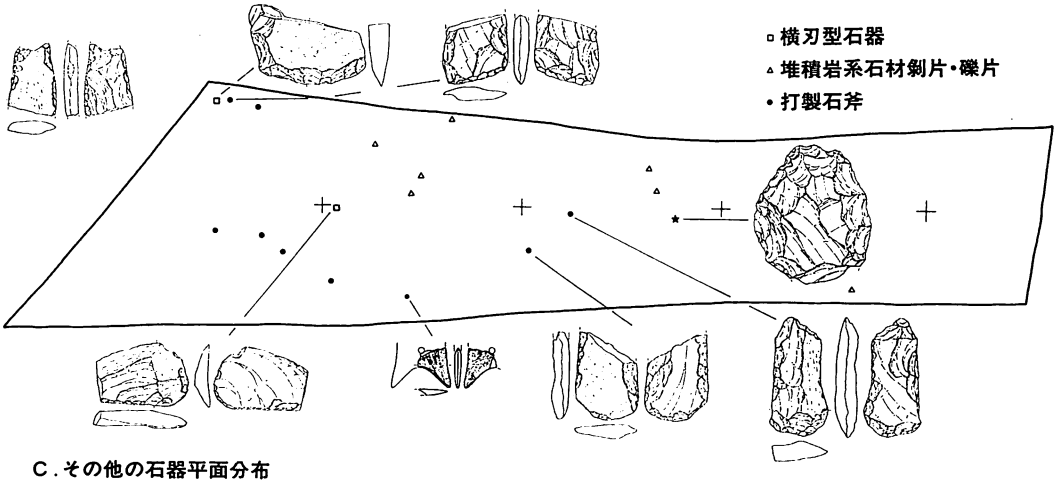
ところで、これまで述べた黒曜石製遺物の集中の他に、発掘区中央の、地形の最も高い地点付近にも、散漫な分布がみられる。この部分については、土層が薄く、所属時期や一括性につ



A.黒曜石製遺物平面分布

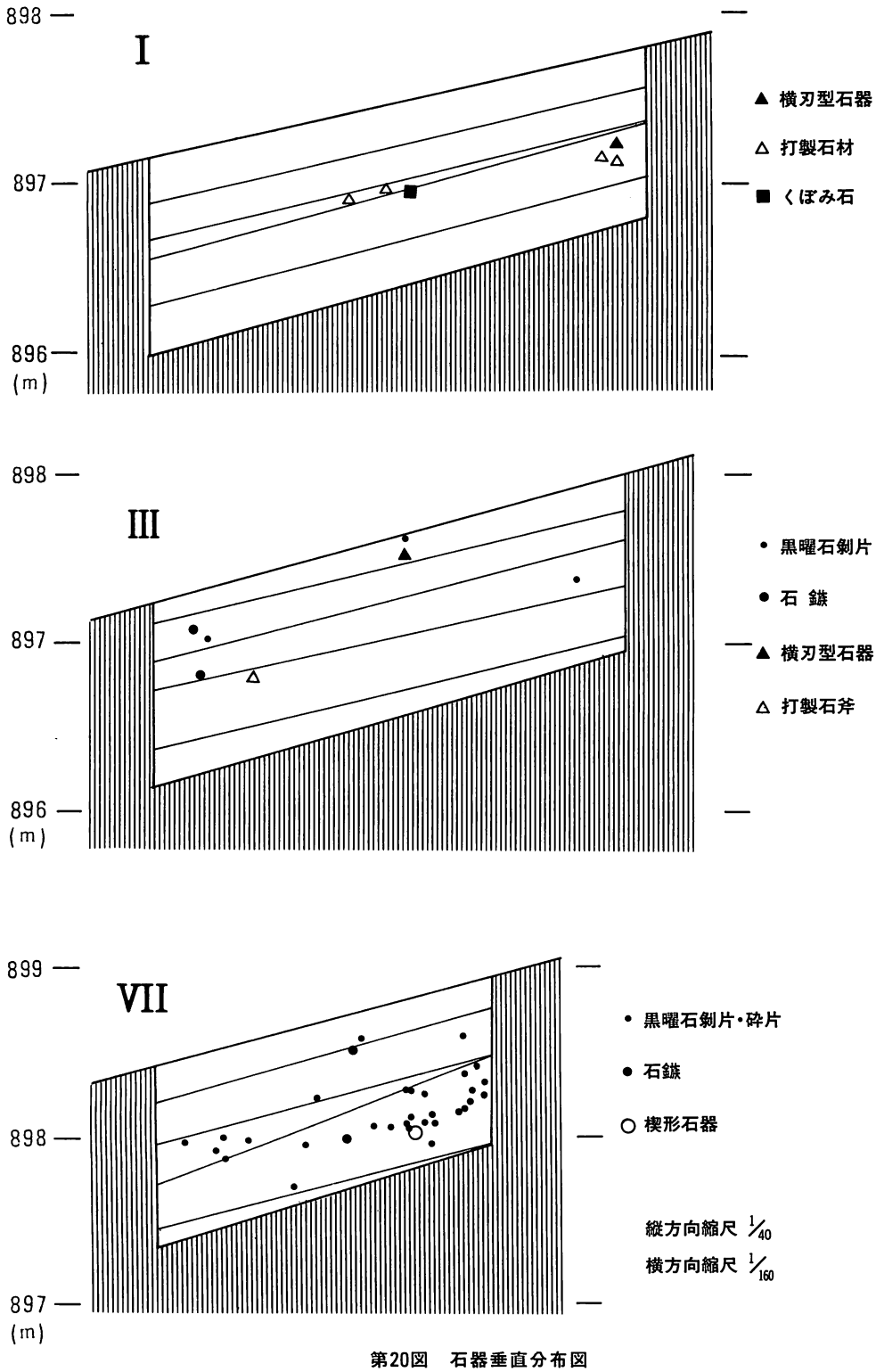


B.敲石・磨石類，くぼみ石平面分布



C.その他の石器平面分布

第19図　石器器種別平面分布図



第20図　石器垂直分布図

いては問えない。

黒曜石製の石器の分布をみると、先述した両集中部に帰属するものが多い。ただし、石槍については、第15図１が試掘調査時に出土したもので、北東部の集中付近から出土したものと思われる。また、第15図２は、道より西側の調査坑より出土している。

ところで、黒曜石製遺物については、個体分類を試み、接合作業も行った。個体については、明らかな単独個体は７点、２～３点の少数個体、数点以上の個体が５個体区分できた。少数点の個体や、接合関係をもつものは、先述した分布単位のうち１カ所内に分布するが、数点以上の個体は、２カ所から３カ所に分散するものばかりである。厳密に区分してゆくと、区分が不可能な砕片を除くと、ほとんどが単独個体か、２～３点程度の個体となる。先述したように、集中部には時期差があると思われるので、こうした個体の状況を考えた方が妥当と思われる。

次に、敲石・磨石類の分布をみてみると（第19図中段）、発掘区中央に分布が限定されている地形の高まりとその傾斜面に位置し、黒曜石製品の集中部に挟まれるように分布する。こうした、分布位置の限定性からして、これらの敲石・磨石類が、同一時期に帰属する可能性が考えられる。こうした石器が多出するのは、早期末の時期にみられるので、その可能性があろう。なお、くぼみ石の分布も同図中に示したが、まったく分布位置が異なっており、時期も違うものと思われる。

打製石斧の分布をみてみると（第19図下段）、発掘区中央にもあるが、むしろ西半部に多く分布している。地形がかなり平担な部分である。さらに、１点は、道より西の調査坑より出土している。横刃型石器も、発掘区西側の打製石斧の分布と重複している。第20図Ｉの垂直分布図で示したように、層位がⅢ層付近から出土しており、かなり浅いレベルである。しかし、この付近から出土している早期末の土器もかなり浅いレベルに位置し、堆積状況からの時期の比定は困難と思われる。しかし、この付近に位置する石器は、打製石斧、横刃型石器、くぼみ石と、中期的な様相のものが多いことは指摘できよう。他に同図中に、堆積岩系の剥片、礫片の分布や、礫器の分布位置も示した。前者については所属時期を問えないが、まとまって出土している地点が指摘できる。礫器は、地形の高まり上にあり、黒曜石製遺物の集中部と敲石・磨石類の分布域の中間に位置する。

このように、石器の分布は、それぞれ分布区域に限定性があり、地形的にもその占地に特徴がみうけられるうえ、分布区域は相互に重複しないように位置している。時期的には、発掘区中央の高まり付近の敲石・磨石類の分布域以東が早期末的な区域、発掘区西側が中期的な区域と考えうる。それぞれの区域内でも時期差がみられようが、それぞれの時期の生活様相が、石器分布に反映されている可能性は指摘できよう。

第６章　まとめ

本遺跡の出土遺物は、縄文時代のものが主体である。土器は、今のところ県内最古に位置付けられる、草創期中葉の爪形文土器が、たった２片であるが発見されたことは特筆に値する。次いで、早期末から前期初頭と思われる土器群で、絡条体圧痕文土器や条痕文土器である。前者は、県内ではあまり類例がなく、注目される。また、後者には、貝殻腹縁による施文がみられるものがあり、その編年的位置が注目される。この他、中期初頭、中期中葉、後期前半の土器群が見い出されている。中期初頭の土器は、比較的量があるが、後の２者については点数が少ない。

石器については、石槍２点があり注目される。いずれも、縄文時代のものと思われるが、爪形文土器との関係は不明である。他に、石鏃、楔形石器、加工痕ある剥片、打製石斧、横刃型石器、礫器、敲石・磨石類、くぼみ石が出土している。これらの所属時期については、明言するにはなかなか困難なものがある。しかし、その形態や、出土位置からして、打製石斧、横刃型石器、くぼみ石等が中期、敲石・磨石類、礫器が早期末頃に帰属している可能性が考えられる。なお、弥生時代後期の磨製石鏃も１点出土している。

土層の堆積と環境の復原　本遺跡の土層は、６層に分層したが、基本的には、表土、耕作土のⅠ層、黒色土層のⅡ層、黒褐色土層のⅢ・Ⅳ層、基盤の韮崎岩屑流の風化土壌であるⅤ・Ⅵ層に分けられる。韮崎岩屑流は、20～30万年前の八ケ岳火山の活動に伴うものである。Ⅰ～Ⅵ層の土層は、この上に直接乗るわけであるが、付編で示したとおり、ＡＴ（22000～21000年前）、ＵＧ（13000年前頃）といった火山ガラスが、どのレベルにおいても均等に少量ずつみられることから、その形成年代を少なくとも13000年前以降とすることが可能であろう。また、縄文時代草創期中頃の爪形文土器の出土からして、10000年前頃以前には、形成を開始しているものと思われる。おそらく、本地域は、先土器時代末から縄文時代草創期初頭にかけてのある時期に、韮崎岩屑流上面を浸食していた河川の営力からのがれ、離水して、段丘化したと思われる。

その後、浸食面の風化、ＡＴやＵＧを混えた二次堆積物の堆積、土壌化が進むが、Ⅲ層以下では、特に窪地などの低い所において、土層の堆積が厚い。出土遺物の時期をみると、Ⅳ層中部からⅢ層にかけて、早期末から中期、後期前半の土器がみられる。これらの時期に、窪地など低い土地での土層堆積の進む条件を考えねばならない。この場合、本遺跡内でⅢ・Ⅳ層がみられない、地形の高まり部分からの土壌の流出もあり得ようが、そこにも遺物の分布がみられることから、それほど大規模には削剝されることはなかったであろう。むしろ、地形の高まり部分においても、土壌が少ないながらも形成されていたことを考えねばならない。おそらく、河川から離水したといっても、河川が溢れ、この地域が冠水することが多かったのではないだろうか。そして、窪地状の所に堆積物が多く堆積したのだろう。

Ⅲ層中の黄褐色砂質土レンズについて、流水などによる短時間の局所的堆積作用によるものとの推定ができた。これは、前述したⅢ・Ⅳ層の堆積作用の要因である流水などの中で、非常

に規模の大きいものであり、土層の中にその記録が残されるほどのものであったと言える。Ⅲ層は、中期から後期の土器群を含む。おそらくこの中のいずれかの時期と思われる。こうした黄褐色土のレンズないしバンドは、高根町清里の丘の公園地内でも確認している。かなり広域的な出来事であったと思われる。今後、注目したい。

Ⅱ層については、Ⅲ層以下とは堆積作用の要因を別なものに求める必要があろう。比較的急傾斜な土地でも堆積し、低い土地でも極端に厚く堆積することがない。これは、流水によると考えるよりも、風等の運搬作用による二次堆積を考えた方が妥当であろう。したがって、Ⅱ層とⅢ層を境に、大きく環境が変化したことが推定できる。Ⅲ・Ⅳ層堆積期は、Ⅱ層堆積期（後期以降）とくらべて多雨な気候が推定可能であろう。

遺物の分布と生活活動の復原　各時期の出土遺物は、発掘区全体に分散し混在するのではなく、ある一定の空間を占居している。巨視的にみると、縄文時代中・後期の土器や、打製石斧、横刃型石器、くぼみ石など、中期以降の遺物は、発掘区中央の地形の高まりより西側の地域に大半が分布する。一方、早期末から前期初頭の土器や、敲石・磨石類、礫器などは、発掘区中央の地形の高まりから東側の地域にも多く分布がみられる。黒曜石製遺物についても、発掘区南西部と北東部に集中部がみられ、その出土レベルからして、南西部が中期頃、北東部が早期末頃と思われる。時期別に主に活用する空間が異なっていたものと理解できよう。

さらに、この中でも遺物の種類によって、分布位置が微妙にずれる傾向がみられるが、ここでは特に、早期末の状況に注目したい。早期末頃に主に利用された空間では、地形の高まり部分に敲石・磨石類、その東端に礫器、高まり上の溝状の窪地部に黒曜石製遺物の集中部、それを取りまくように土器の分布がみられる。早期末から前期初頭の土器は、地形の高まり直下の溝状の窪地ないしは緩斜面にも分布がみられる。こうした遺物の製作、使用、廃棄をもっぱらにするような特定の空間の存在が推定しうる。

ただし、早期末から前期初頭については、その土器は、胎土の特徴からして、八ケ岳山麓以外の場所で作られたものが大半を占める。土器の大半は搬入品である。また、敲石・磨石類の中に、１点だけ他地域の石材のものがある。礫器もその石材は他地域のものであり、製作時の剥片がないことから、搬入品と考えられる。かなり遠方の地点で作られ、搬入されたものが多く見うけられる。黒曜石製品については、剥片、砕片の存在から、ここで製作されたものがあると思われる。しかし、単独個体が存在し、製品の状態で搬入されたものもあったと思われる。さらに、個体分類を厳密にすると、１個体１～３点のものがほとんどとなる。また、接合関係も少なく、石核の数も少なく、石核を含まない個体が大半である。本遺跡でなされる剥片生産の量が１個体あたりでみると非常に少なく、１個体を全部消費するようなものではないと言える。こうした個体が、集積して集中部を形成している訳だが、その形成が、短期的集中的なものなのか、長期的間欠的なものなのか問題となる。判断材料にとぼしいが、この集中部近くに分布する土器は２個体分あり、これが伴うものとすれば、これを使用し廃棄するまでの期間ということになり、短期的集中的な性格が強くなろう。

それぞれの遺物が占地する空間相互が、厳密な意味で同時存在であったかは、判断材料にと

ぼしいが、それぞれを用いた作業の場が区別されていたことは理解できる。遺構こそ存在しないが、本遺跡のように、遺物の分布で示される空間構造を持つ遺跡の存在も認識する必要がある。黒曜石製遺物の個体のありかたにみるように、こうした遺跡が相互にむすばれた構造を持っている可能性がある。また、土器の胎土や石器石材にみるように、その構造でむすばれる地域は、かなり広域（八ケ岳山麓を出るような広がり）であったことも推定しうる。こうした、遺跡間の構造が早期末の社会のありかたの一端を示している可能性も指摘できよう。

註

(1) 山梨県教育委員会　1987　『八ケ岳東南麓他遺跡分布調査報告書』
　　山梨県教育委員会　1989　『八ケ岳東南麓他遺跡分布調査報告書』
(2) 山梨県教育委員会　1988　『西川遺跡』
(3) 山梨県教育委員会　1989　『妻ノ神遺跡』
(4) 1986年実施長坂町遺跡分布調査台帳および1978年実施小淵沢町遺跡分布調査台帳による
(5) 森本圭一　1968　「山梨県内出土の石器について」　甲斐考古５－４
(6) 長坂町教育委員会　1985　『小和田館跡　発掘調査概報』
(7) 小林達雄氏・可児通宏氏・谷口康浩氏のご教示による。爪形文土器にはその文様もさることながら、砂粒・雲母を多く含む胎土と焼きが良く薄い器壁に特徴があるという。
　　太田市教育委員会　1985　『下宿遺跡』
　　太田市教育委員会　1987　『下宿遺跡Ｅ地点』
(8) 河西学氏のご教授による。

付編　長坂町中込遺跡試料のテフラ分析

河　西　学

1. はじめに

中込遺跡は八ケ岳南麓を南流する古杣川右岸に形成された狭小な平坦面上に位置する。両側には韮崎岩屑流に伴う流れ山が分布する（河内、1977）。八ケ岳火山権現岳に水源を発する古杣川は火山麓扇状地を形成しながら南流し、遺跡付近で両岸の流れ山の間をぬう途中で流れを南西方向に転じ、再び南流する。古杣川に面した段丘の崖線に沿って韮崎岩屑流堆積物が露出している。

遺跡西方の流れ山の道路切り通し断面では韮崎岩屑流堆積物をおおうと推定される八ケ岳火山起源のスコリア質～石質降下テフラ層の何枚もの堆積が約３ｍ以上露出する。その上位に御岳第１軽石Pm－Ⅰ（約７～９万年前）以上のローム層が約2.8ｍの厚さで堆積している。

遺跡内では、砂礫層の上位に暗褐色土・黒褐色土・黒色土がそれぞれ堆積し、最上部は約20cmの黒褐色表土がのる。Ｂ地点では黒色土直下の黒褐色土層中に黄褐色砂質土が約５～10cmの厚さで斑状に点在して連続する。なお砂礫層は、最大径1.2ｍの灰色の両輝石安山岩の亜角～亜円礫を含み、新鮮な基質は中粒～粗粒の硬質の火山砂からなりやや多孔質な部分が見られることから、韮崎岩屑流堆積物であると考えられる。砂礫層と上位の暗褐色土との境界は漸移的である。本遺跡では縄文草創期の爪形文土器および縄文早期末～前期初頭の絡条体圧痕文土器が出土している。本遺跡の堆積土層中におけるテフラの含有からこの地域の堆積について考察したい。

2. 試料・分析

本遺跡のトレンチ北壁断面Ａ・Ｂ地点において高さ約５cmおきに幅10cm高さ５cm奥行５cmの直方体部分から試料を採取した（第１図）。

試料は、湿ったまま約20ｇを秤量後、水を加え超音波装置を用いて分散をはかり、分析篩（＃250）で受けながら泥分を除去した。乾燥後、分析篩（＃60・＃250）を用いて＞1/4㎜および1/4～1/6㎜の粒径に篩別・秤量し粒径組成を算出した。なお分析に用いた試料の乾燥重量は、別に同一試料約５～10ｇを秤量ビンにとり秤量後、乾燥器で105℃、５時間放置して得られた乾燥重量から算出した。鉱物粒子の観察は、1/4～1/16㎜の粒径砂をスライドグラスに封入し偏光顕微鏡下で行なった。１試料ごとに火山ガラス・軽鉱物・重鉱物の合計が300粒以上、また風化物その他の粒子を含めた合計が500粒以上になるように計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木（1980）の方法に従い、細粒結晶を包有するＦ型火山ガラスはＦ′型とした。

3. 分析結果

偏光顕微鏡下での計数結果を第１表に示す。これをもとに粒径組成、火山ガラス・軽鉱物・重鉱物組成、形態別の火山ガラス含有量、および重鉱物組成を第１図に示す。なお形態別火山ガラス含有率は、試料単位重量当たりの1/4～1/16㎜粒径の火山ガラスの割合で表示した（注１）。

付編　第１表　中込遺跡試料の含有鉱物粒数　（＋は計数以外の検出を示す）

地　点	A 地 点										B 地 点									
試料番号	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10
A　無色	4	5	2	8	10	8	6	3	6	2	1	3	5	7	5	13	11	4	3	
A'　無色	1	11	9	15	22	18	8	3	6	7	4	7	10	10	6	16	8	10	4	9
A'　褐色	2																			
B　無色	10	2	12	12	17	7	13	14	16	14	3	11	14	3	10	9	7	13	8	9
B　褐色							1		1						1					
C　無色	5	5	6	4	11	7	4	2	2	3	5	6	4	7	8	7	2	7	4	3
C　褐色									1							1	2			
D　無色						1		1					1							
E　無色	1	1		1	2	1					2	4	1	8		1				
F　無色	4	6	11	14	16	12	6	3	8	5	10	13	12	19	4	5	4	7	3	2
F　褐色		2		1	1			2	1	3				1	1	1				1
F　緑褐色											1									
F'　無色	2	2	2	2	3	2	2	1	1			1	1	3	2	3		1		
F'　褐色	5	9	3	4	4	2	5	3	1			1	2	2	4	1	1			
F'　緑褐色		2	1	6	1							3	3				3			
石英	3	5	5	7	17	13	10	16	18	14	6	8	8	10	8	5	3	7	6	7
長石	188	148	143	107	63	49	38	48	41	33	102	106	86	53	58	55	51	49	32	57
カンラン石		2	1		1	2	3	5	8	8	1	7	2		5	4	4	6	10	4
斜方輝石	32	44	51	70	83	78	98	107	105	115	61	75	81	88	132	86	96	111	81	93
両輝石平行連晶							2		3		2				1	1	1			2
単斜輝石	24	35	32	71	79	64	82	89	69	65	45	64	70	73	110	72	77	80	59	92
角閃石			1		6	1	6	4	9	2	1	3	5	1			1	1	7	4
酸化角閃石					3		1	4						2		2				1
ジルコン												＋						＋		
リン灰石							1													
不透明鉱物	79	93	97	118	152	108	111	115	118	122	116	138	156	132	140	114	120	124	99	110
雲母			1		4	1	1			4	1	1	1		2	1				1
その他	233	175	152	106	77	147	121	97	137	160	205	107	162	149	82	113	154	112	186	121
合計	593	547	529	546	572	521	519	517	551	557	566	558	624	568	579	510	545	532	502	516
重鉱物小計	135	174	182	259	324	253	304	324	312	312	226	287	314	296	388	279	299	322	256	306
軽鉱物小計	191	153	148	114	80	62	48	64	59	47	108	114	94	63	66	60	54	56	38	64
火山ガラス小計	34	45	46	67	87	58	45	32	43	34	26	49	53	60	41	57	38	42	22	24

A地点

粒径組成のうち砂の含有率は10～24%である。砂のうち1/4～1/16㎜の砂は安定した含有率を示すが、＞1/4㎜の増減に変化が見られる。粒径組成中の砂分含有量は最下部のNo.10の24%を最大に上方にむかって緩やかに漸減する傾向が認められるが、黒色土層中No.3で20%を越える小ピークをもつ。最下部の試料は風化作用により粘土化しているため砂の抽出過程で多くが分解してしまい粒径組成に占める砂分量はあまり多くない。

火山ガラス・軽・重鉱物組成では、火山ガラスが黒褐色土中No.5～6で16～18%の小ピークを示す。この付近を境にして、火山ガラス・重鉱物は上方にむかって漸減し、軽鉱物は漸増する。またNo.1～4の軽鉱物において長石特に斜長石の含有が顕著である。重鉱物は下部のNo.7～10で約80%前後と卓越し、その後漸減しつつNo.1で38%を占める。

さらに形態別の火山ガラス含有率を見ると、どの形態の含有率も最大で1%未満であり、顕著なピークが認められず、連続的にわずかずつ検出されるにすぎない。A′・B・F型火山ガラスが比較的多い。

重鉱物組成は、斜方輝石（24～37%）・単斜輝石（18～27%）・不透明鉱物（35～59%）から主として構成され、上方にむかって不透明鉱物が漸増するのに対し斜方輝石は漸減する。輝石は斜方輝石＞単斜輝石である。そのほか、カンラン石・角閃石・酸化角閃石・両輝石平行連晶などがわずかに検出される。

B地点

粒径組成は、砂がNo.8で11%の最小値を示し、上方にむかって緩やかに漸増し、最上部のNo.1では28%の最大値を示す。A地点と同様に1/4～1/16㎜の含有量は安定し、＞1/4㎜の含有量が変化に富む。黄褐色砂質土が斑状に堆積するNo.5付近においても粒径組成での変化は見られない。

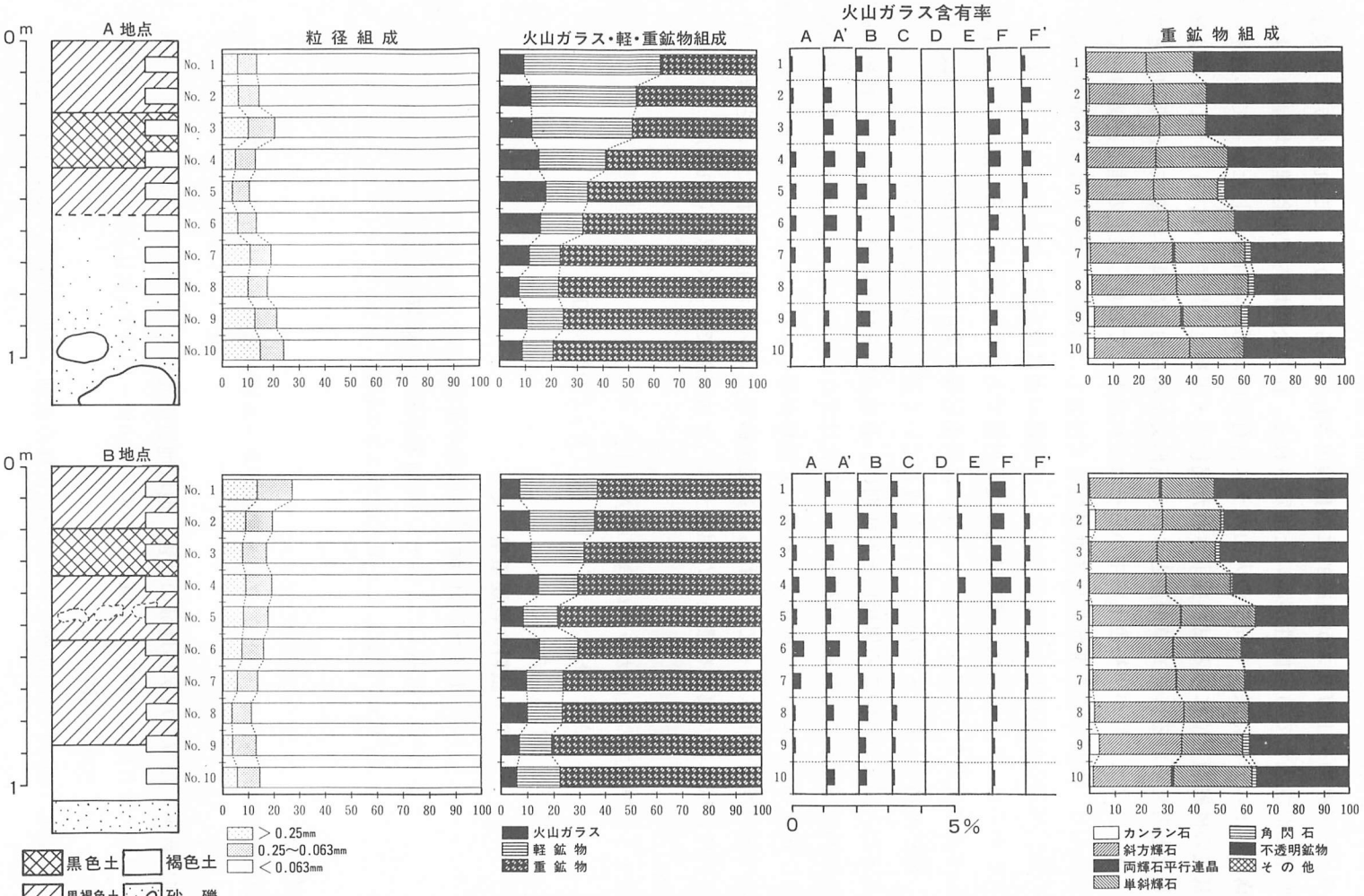
火山ガラス・軽・重鉱物組成では、火山ガラスが黒褐色土中No.6・4で14%の小ピークを示す。この付近を境にして、火山ガラス・重鉱物は上方にむかって漸減し、軽鉱物は漸増する。A地点と同様に重鉱物の割合が約60～80%ときわめて高率である。

形態別の火山ガラス含有率では、どの形態の含有率も最大で1%未満であり、顕著なピークが認められず、連続的にわずかずつ検出されるにすぎない。A′・B・F型火山ガラスがふつうに見られ、F型火山ガラスはNo.4から上方で多い傾向がある。

重鉱物組成は、斜方輝石（26～34%）・単斜輝石（20～30%）・不透明鉱物（36～51%）から主として構成され、上方にむかって不透明鉱物が漸増するのに対し斜方輝石・単斜輝石は緩やかに漸増する。輝石は斜方輝石＞単斜輝石である。そのほか、カンラン石・角閃石・酸化角閃石・両輝石平行連晶・ジルコンなどがわずかに検出される。

4. 考　察

火山ガラスの産出状況は、A・A′・B・C・F・F′型などが微量ながら連続して検出されるが、顕著なピークは認められない。特にA・A′型火山ガラスのピークで特徴づけられる姶良Tn火山灰（AT：町田・新井、1976）の降灰層準、およびB・C型火山ガラスからなるUG（山



付編第１図　中込遺跡 A・B地点　試料の粒径組成、火山ガラス・軽・重鉱物組成、火山ガラス含有率、重鉱物組成

崎、1978）の降灰層準は今回の分析において明確には認められない。しかしこれらのテフラを特徴づける形態の火山ガラスが連続的に微量検出されていることから、これらのテフラ粒子の二次堆積物が混入してる可能性が高いと推定される。丘の公園地内での谷埋め堆積物および陥穴遺構埋積土の分析結果でも同様の火山ガラス含有傾向が認められる。したがって本遺跡において基底の砂礫層上位にのる試料採取された褐色土・黒褐土・黒色土は、ＡＴ・ＵＧ降灰後に堆積したと考えられる。縄文草創期とされる爪形文土器片および縄文早期末～前期初頭とされる絡条体圧痕文土器片が黒褐色土層中からそれぞれ出土しており、以上の推定と調和的である。

古柚川は、開析が進み韮崎岩屑流堆積物まで浸食し、遺跡周辺に狭小な平坦面を形成した。その後、河道の側方移動と下方浸食によって遺跡の面は段丘化したと推定される。おそらく段丘化したのは、先土器時代と縄文時代の境界付近であったと推定される。離水時、段丘面上には旧河道に由来する凹凸が存在し、凸部には安山岩礫の集中した分布が残された。段丘化した後、細粒堆積物が褐色～黒褐色土層を形成していく過程で爪形文・絡条体圧痕文土器片の堆積があった。縄文時代中ごろ黒褐色土形成期に、Ｂ地点№５付近に見られるような黄褐色砂質土の局所的な堆積がみられる。粒径組成での変化は認められないが、火山ガラス・軽・重鉱物組成および重鉱物組成において前後との軽微な非調和が認められる。おそらく流水などによる短時間の局所的堆積作用によって、これらの黄褐色砂質土レンズが形成されたものと推定される。その後に形成された腐食を濃集した黒色土は八ケ岳南麓でひろく認められる。

注１　形態ｘ型の火山ガラスの含有率Ａｘは、

$$Ax(\%) = (C/B) \times (Ex/D) \times 100$$

で算出される。ただし、

Ｂ：試料の乾燥重量（ｇ）

Ｃ：1/4～1/16 ㎜ 粒径砂分の重量（ｇ）

Ｄ：計数した1/4～1/16㎜ 粒径粒子の総数

Ｅｘ：計数したｘ型火山ガラスの粒数

引用文献

遠藤邦彦・鈴木正章（1980）立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層．考古学と自然科学，13，19―30.

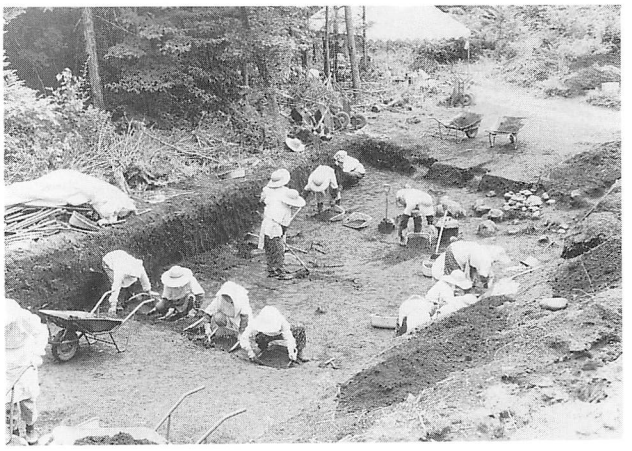
河内晋平（1977）八ケ岳地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１図幅），地質調査所，92p.

町田洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰―姶良Ｔｎ火山灰の発見とその意義―．科学，46，339 ― 347 .

山崎晴雄（1978）立川断層とその第四紀後期の運動．第四紀研究，16，231 ― 246.

中込遺跡遠景

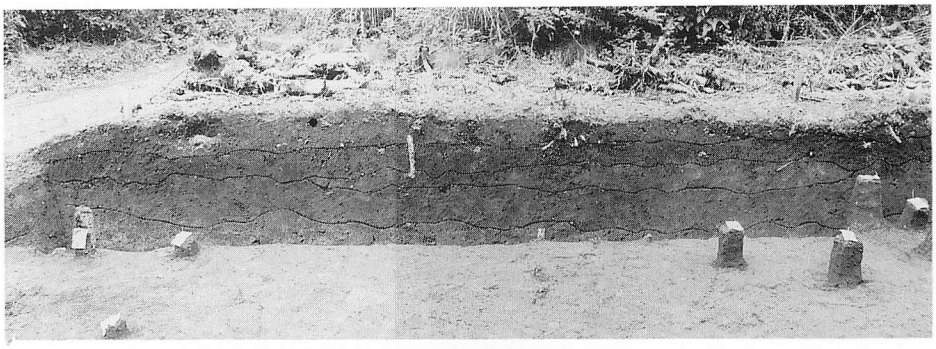
土器出土状況



発 掘 風 景

東区遺物出土状況

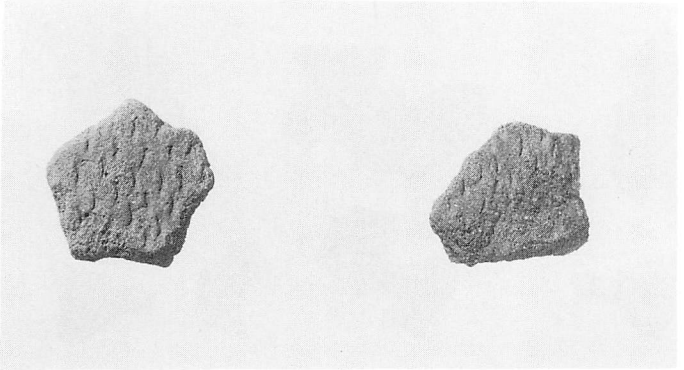
図版2



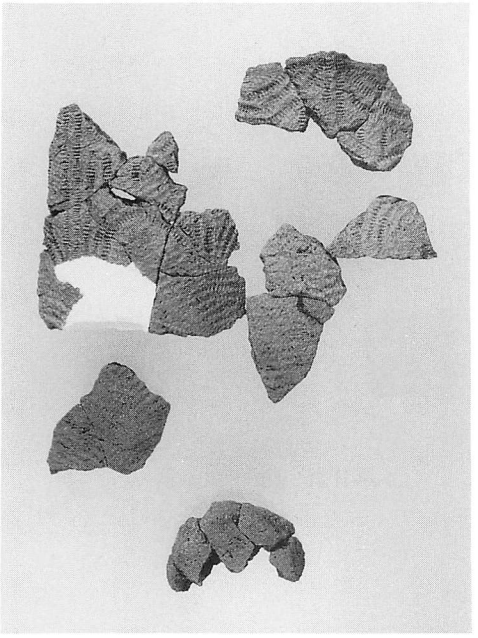
上　南壁セクション

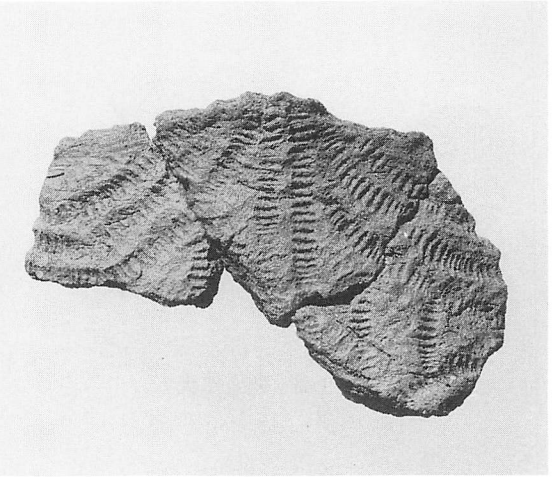
中　西区トレンチ

下　東区東半発掘状況

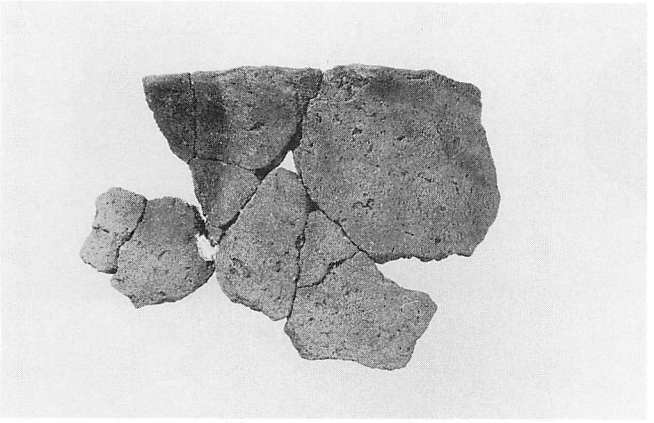


第Ⅰ群 土器

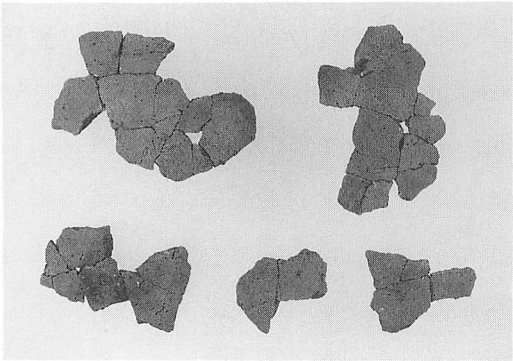




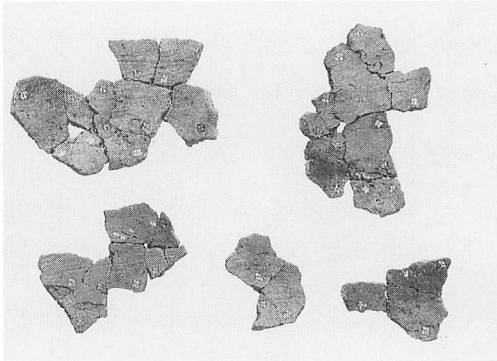
第Ⅱ群 1類土器



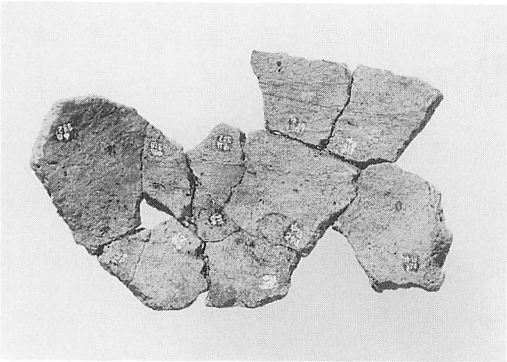
第Ⅱ群 5類土器



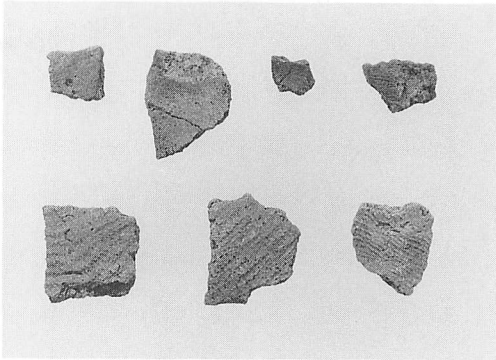
第II群 2類土器(表面)



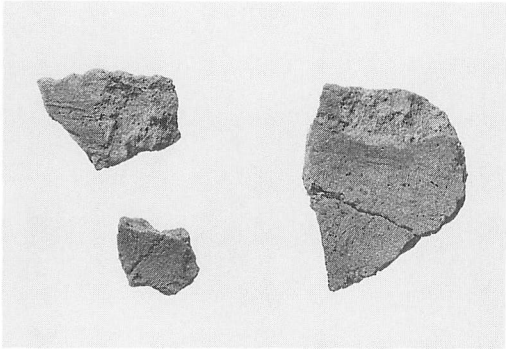
第II群 2類土器(裏面)



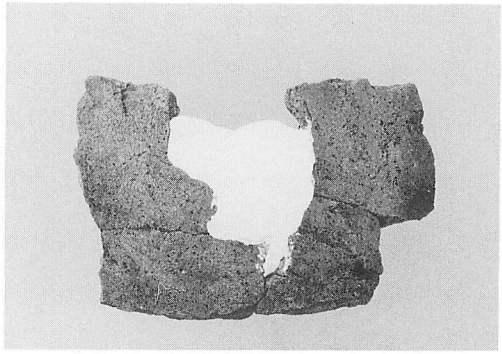
第II群 2類土器(裏面拡大)



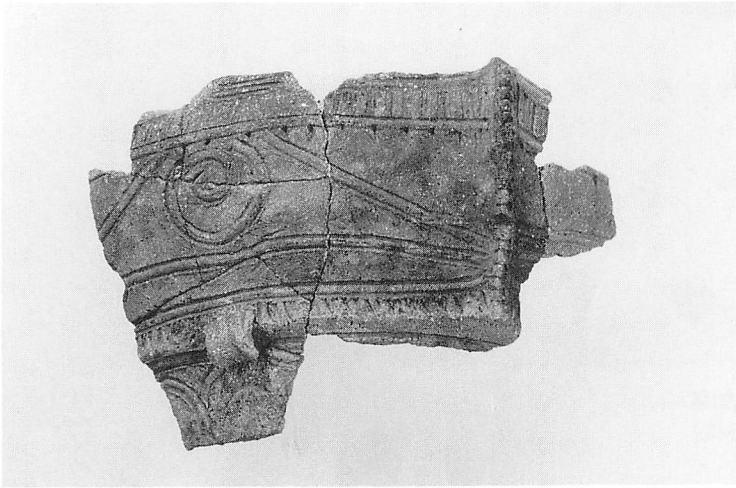
第II群 2類・3類土器



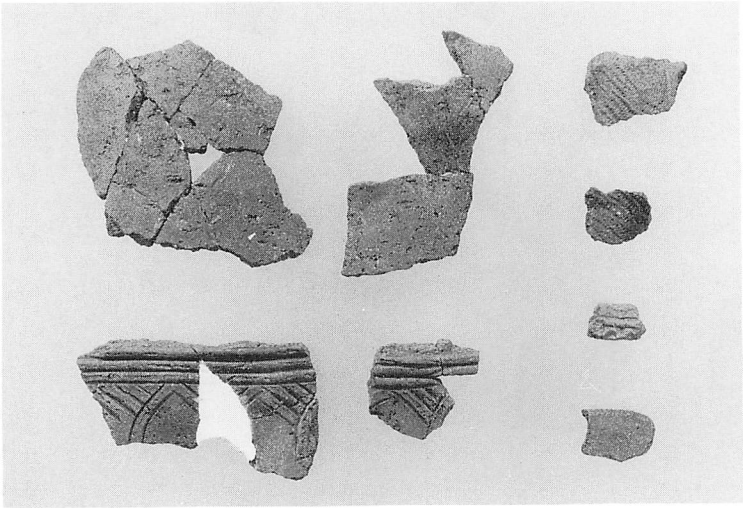
第II群 2類土器(貝殺腹縁文)



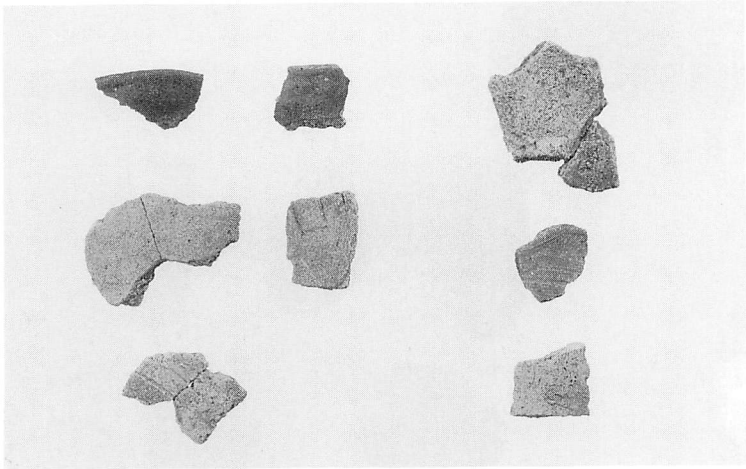
第II群 5類土器



第Ⅲ群 1類土器

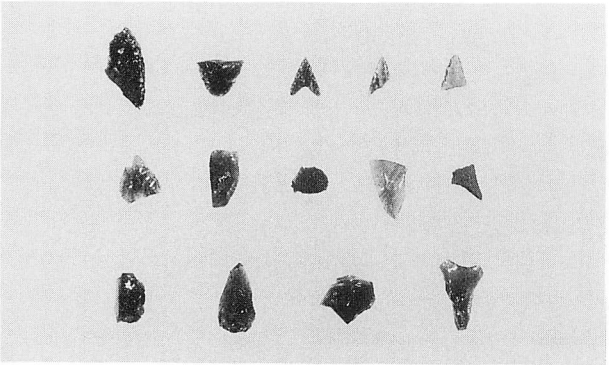


第Ⅲ群 1類土器

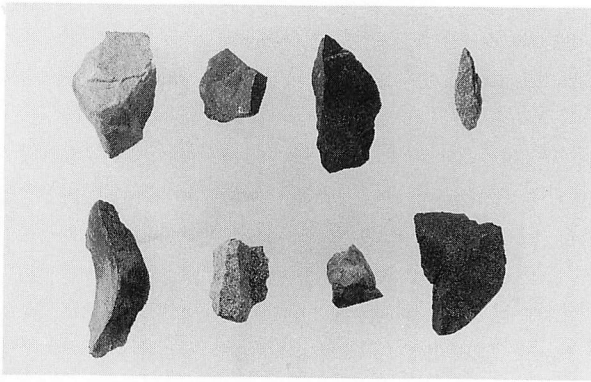


第Ⅳ群 土器

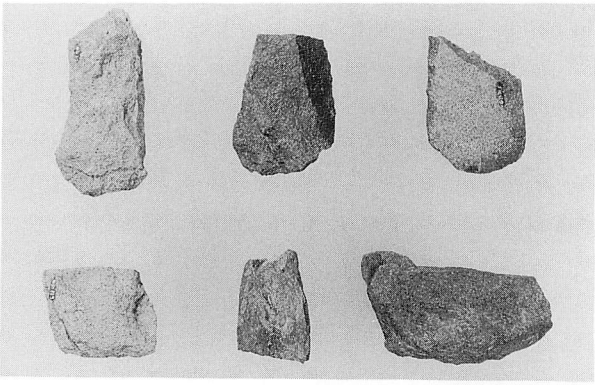
図版6



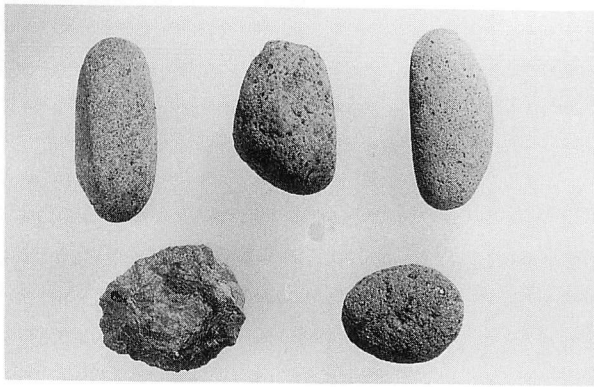
黒曜石製石器と磨製鏃
（下段は、里曜石石核）



堆積岩系石材の剝片・礫片



打製石斧と横刃型石器



磨石・敲石類，礫器，くぼみ石

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第52集

中　込　遺　跡
NAKA　GOMI　SITE

平成２年３月20日　印刷
平成２年３月31日　発行

編集　山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曽根923
ＴＥＬ　０５５２－６６－３８８１
発行　山梨県教育委員会
印刷　（有）新星堂印刷